

市原市石川須恵器窯跡確認調査報告書

昭和 63 年 3 月

財団法人 千葉県文化財センター

市原市石川須恵器窯跡確認調査報告書



昭和 63 年 3 月

財団法人千葉県文化財センター

序 文

千葉県内には、専門工人によって生産された埴輪や須恵器の窯跡が、十数か所存在することが確認されております。これらは、古代房総における生産遺跡であります、今まで発掘調査されその実態が把握された例は少なく、今後の研究課題となつておきました。

また、窯跡の所在する場所が台地下の山裾斜面に立地することから、開発の危機にさらされております。

そのため、千葉県教育委員会では昭和58年から60年にかけて県内所在の生産遺跡詳細分布調査を実施し、今後の保護・活用を図るための資料を得ております。この成果を基礎として、生産遺跡の中で特に窯跡遺跡について、その規模や性格等を明らかにするため、国の補助金を得て確認調査を実施することになりました。

本年度は、市原市石川に所在する石川須恵器窯跡の調査を実施し、窯跡3基が所在することを確認しました。この窯跡は、登り窯であり奈良時代の須恵器や布目瓦を検出することができました。今回の調査により当初は窯跡1基と考えられていたものが、3基の所在を確認するなど市原地方における須恵器の生産遺跡について解明する上で重要な資料を得ることができ、大きな成果があったと考えております。

このたび、発掘調査の記録及び出土品の整理が終了し、調査報告書として刊行する運びとなりました。この報告書が学術的資料としてはもとより、文化財の保護・活用のために広く一般の方々にも利用されることを願ってやみません。

終りに当たり、調査に快く土地を提供いただいた土地所有者の方々、また市原市教育委員会の御協力や、調査を担当された財団法人千葉県文化財センター職員及び調査補助員の皆様に対し、心からお礼申し上げます。

昭和63年3月31日

千葉県教育庁文化課長

竹内 一雄

例　　言

1. 本書は、千葉県市原市石川586-1他に所在する石川須恵器窯跡（遺跡コード219-037）の確認調査報告書である。
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助金を得て、調査を財団法人千葉県文化財センターへ委託して実施した。
3. 調査は、昭和62年10月1日から同年11月12日まで行った。また、地形図は業者委託で実施した。
4. 調査及び整理作業・原稿執筆に当たっては、研究部長 堀部昭夫、部長補佐 渡辺智信、古内 茂のもとに主任調査研究員 奥田正彦が担当した。
5. 調査の実施に当たり、市原市教育委員会から多くのご協力を得た。
6. 調査の実施に当たっては、下記の方々から多くのご協力、ご教示を賜った。

市原市教育委員会文化課係長 須田 勉
財団法人市原市文化財センター 調査研究員 田所 真
土地所有者 薄綱 茂 高嶋 騰
石川地区の皆様方
7. 本書に使用した方位は座標北である。
8. 本書に使用した地形図は、国土地理院著作・発行の $\frac{1}{2500}$ 地形図、鶴舞（つるまい）である。
9. 本書の図版1の航空写真($\frac{1}{10,000}$)は京葉測量株式会社、コース番号C37-23、1987年撮影(原版は $\frac{1}{10,000}$)を $\frac{1}{10,000}$ に引き伸ばして使用した。
10. 本書において、遺物実測図は、全て原寸の $\frac{1}{4}$ である。遺物写真は、図版24の160、図版25の163は原寸の約 $\frac{1}{2}$ 、他の遺物写真は約 $\frac{1}{2}$ である。また、遺物実測図のスクリーントーンの部分は、壺類、蓋類が火グスキ、壺類が自然灰釉を表現している。

目 次

序文

例言

| | |
|------------------|----|
| I. 遺跡の位置と環境..... | 1 |
| II. 調査の概要..... | 3 |
| 1 立 地..... | 3 |
| 2 調査の方法と経過..... | 3 |
| 3 各トレンチの状況..... | 5 |
| III. 遺 構..... | 9 |
| IV. 遺 物..... | 14 |
| V. まとめ..... | 25 |
| 出土遺物表..... | 28 |

挿 図 目 次

| | |
|---|----|
| 図 1 周辺地形図 ($1/2,500$) | 2 |
| 図 2 トレンチ配置図(1) ($1/50$)・トレンチ土層断面図 (1) ($1/5$) | 6 |
| 図 3 トレンチ土層断面図 (2) ($1/5$) | 7 |
| 図 4 トレンチ配置図 (2) ($1/50$)・トレンチ土層断面図(3) (3) ($1/5$) | 8 |
| 図 5 遺構配置図 ($1/50$) | 10 |
| 図 6 遺構土層断面図 (1) ($1/5$) | 11 |
| 図 7 遺構土層断面図 (2) ($1/5$) | 12 |
| 図 8 第2地点 平面図 ($1/50$) | 13 |
| 図 9 遺物実測図 (1) ($1/4$) | 15 |
| 図10 遺物実測図 (2) ($1/4$) | 16 |
| 図11 遺物実測図 (3) ($1/4$) | 17 |
| 図12 遺物実測図 (4) ($1/4$) | 18 |
| 図13 遺物実測図 (5) ($1/4$) | 20 |
| 図14 遺物実測図 (6) ($1/4$) | 22 |
| 図15 遺物実測図 (7) ($1/4$) | 23 |
| 図16 遺物実測図 (8) ($1/4$) | 24 |
| 付図 石川須恵器窯跡地形図・トレンチ配置図 ($1/500$) | |

図版目次

- | | |
|--|------------------------|
| 図版1 航空写真 ($\frac{1}{10,000}$) | 図版9 1. 左 Yトレンチ 2. 右 Xト |
| 図版2 1. 遺跡近景 2. 遺跡近景 | レンチ 2. 第2地点 3. 第2地 |
| 図版3 1. 調査前 2. 調査前 | 点 灰原? |
| 図版4 1. Qトレンチ深掘断面 2. Rト レンチ深掘断面 3. Sトレンチ深 掘断面 4. Tトレンチ深掘断面 5. Vトレンチ 6. Wトレンチ | 図版10 出土遺物 (1) |
| 図版5 1. 1号窯跡および灰原全景 2. 1号窯跡 | 図版11 出土遺物 (2) |
| 図版6 1. 1号窯跡断面A-A' 2. 1号 窯跡灰原断面D-D' 3. 同上 | 図版12 出土遺物 (3) |
| 図版7 1. 2、3号窯跡断面 2. 2号窯 跡断面 3. 3号窯跡断面 | 図版13 出土遺物 (4) |
| 図版8 1. 住居跡 2. 炭窯跡 3. 溝状 遺構 | 図版14 出土遺物 (5) |
| | 図版15 出土遺物 (6) |
| | 図版16 出土遺物 (7) |
| | 図版17 出土遺物 (8) |
| | 図版18 出土遺物 (9) |
| | 図版19 出土遺物 (10) |
| | 図版20 出土遺物 (11) |
| | 図版21 出土遺物 (12) |

I. 遺跡の位置と環境

石川須恵器窯跡は、千葉県の中央やや南に位置する。(中表紙参照)行政上は市原市に所在する。

市原市は、千葉県のほぼ中央に位置し、南北に長く、東西に短い市域を有している。地形上は、北部の洪積台地(下総台地)、南部の丘陵地帯(上総丘陵)、市域を東西に分けて北流し、東京湾に注ぐ養老川によって形成された河岸段丘、沖積低地に大別される。

石川須恵器窯跡は、養老川の支流の内田川と内田川の小支流である石川川にはさまれた丘陵の南側、石川川に臨む尾根状丘陵の北側斜面に位置する。(図1の1)字名は、石川字籠田で、国道297号と国道409号との交差点の東約2.3kmにあり、石川川をはさんだ対岸の丘陵上には、大藏屋鶴舞団地が造成されている。石川川の谷津の部分は、石川に属し両岸の丘陵は鶴舞に属する。本跡の北隣の丘陵は、字名が鶴舞字黄金台である。

また、本跡は上総丘陵の北辺部に位置し、標高100m前後の丘陵が、養老川の支流により樹枝状に開拓されている。養老川は、大きく蛇行しながら北流し、本遺跡周辺でも曲流・短絡地形や人工的な川廻し地形など特徴的な景観を見せている。

養老川流域には、先土器時代から中近世に至る数多くの遺跡が存在している。本遺跡付近においても東に隣接する石川城跡、北側丘陵上の原田遺跡(縄文、古墳時代)、石川川の対岸の丘陵上、江古田から富士台にかけて所在する江古田古墳群とその北に隣接する江古田上原台遺跡(南總中学遺跡、先土器~奈良・平安時代)など多くの遺跡が分布している。⁽¹⁾

また、本遺跡と密接な関係があるとされる永田・不入窯跡⁽²⁾は、本遺跡の南約3.5kmに位置する。(図1の2-永田、図1の3-不入)さらに、本遺跡及び永田・不入窯跡で生産された須恵器の主な供給先と考えられている上総国分寺跡は、本跡の北約13kmに位置している。また、本跡と直接的な関連はないと考えられるが、古墳時代の須恵器窯跡である緑岡窯跡は本跡の南約4.2km、永田・不入窯跡の南西約0.7kmに位置している。(図1の3)

(注)

(1) 「千葉県埋蔵文化財分布地図(3)一市原市・君津・長生地区」 千葉県教育委員会 昭和62年

(2) 大川 清 「千葉県市原市 永田・不入須恵器窯跡調査報告書」 千葉県教育委員会 昭和51年
山口直樹 「一千葉県市原市一 永田、不入窯跡」 市原市教育委員会・財團法人 市原市文化財センター 昭和60年

参考文献

前田四郎監修 千葉県地学のガイド編集委員会編 地学のガイドシリーズ 2 「千葉県 地学のガイド」 コロナ社 昭和49年
『角川日本地名大辞典 12 千葉県』 角川書店 昭和59年

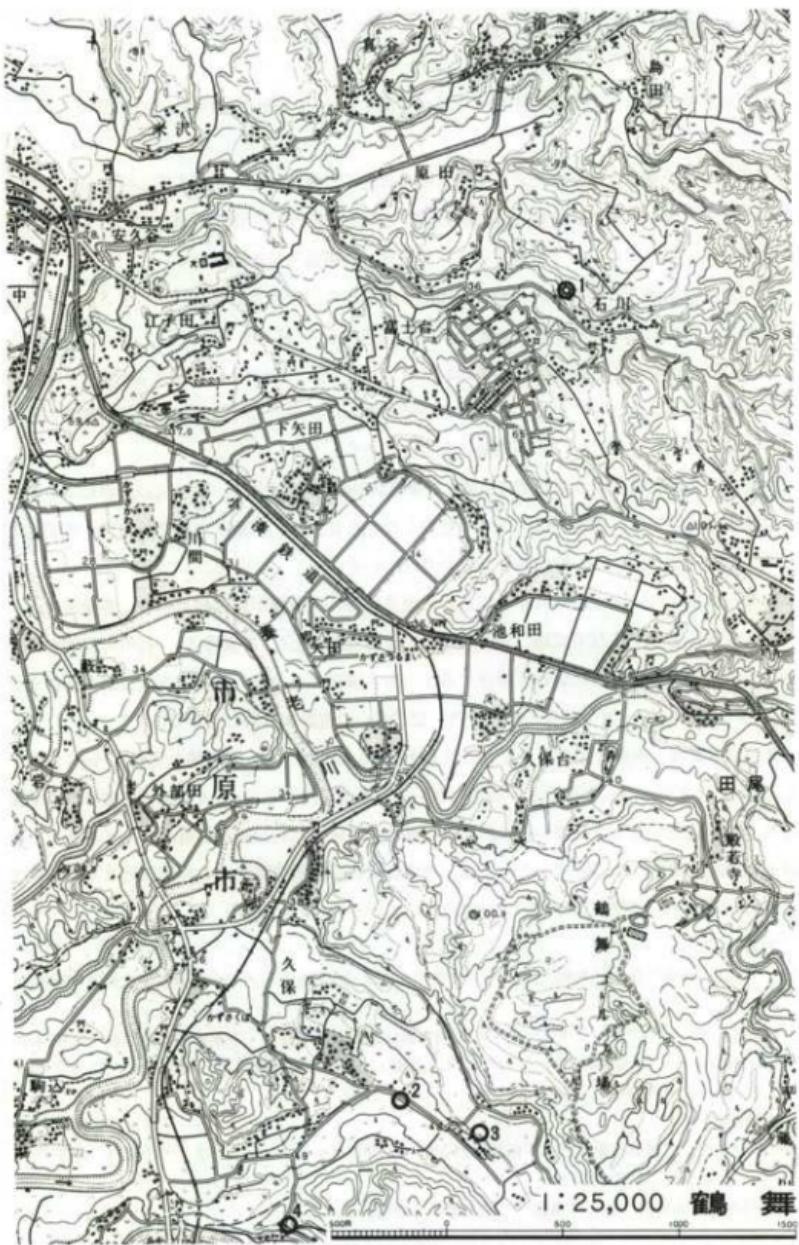


図1 周辺地形図 (1/25,000)

II. 調査の概要

1 立地 (付図、図版1~4)

本遺跡は、標高約80mの黄金台の丘陵の南辺部に位置する。主丘陵（黄金台の丘陵）から西へのびた細長い尾根状丘陵の先端部北側斜面に立地する。尾根状丘陵は幅約30mで先端部ほど狭くなるが、宅地や水田造営などによる削り取が行われた可能性が強い。現況は山林で、先端部は一部竹林である。尾根状丘陵と主丘陵の間は、幅約12mの細長い谷である。現況は、谷口部分が畠、谷の中央部から奥部は休耕田になっている。しかし、元は全て谷津田であり、現在でもかなりの湧水がみられる。

休耕田面と主丘陵との比高差は、約25mで急傾斜（約38°）を呈する。また、尾根状丘陵の最高点と休耕田面との比高差は約10mであるが、先端部では2~3mで低い崖状になる。尾根状丘陵と石川川の低地面との比高差は、最高点との差で約24m、先端部でも約9mで、かなりの傾斜を呈している。

尾根状丘陵は、先端部にむかってゆるやかに傾斜し、先端部では更に傾斜が緩くなり、テラス状の平坦部となっている。そして、更に先端にむかって傾斜し、急激に幅が狭くなる。この幅が狭くなる部分は、元来、石川川側に張り出していたと考えられるが、宅地や水田造営のために削り取られたと思われる。また、北側の斜面も水田造営のため削り取られ、現在の様に崖状になったと考えられる。

本遺跡は、この尾根状丘陵の先端部に主要な遺構が存在すると考えられた。それは、緩傾面から平坦面にかけての休耕田側崖面に灰原及び窯体の一部が露出し、灰原の断面や休耕田面より須恵器が採集されているからである。また、尾根伝いに丘陵上へ登る道として削られた部分に、窯体の一部が露出しているのが観察されている。

2 調査の方法と経過 (付図)

本調査は、遺構の規模、性格及び分布状況を明確にすることを目的とした確認調査である。

調査地区は大きく3か所に区分される。窯体、灰原が確認されいる尾根状丘陵上部分、崖面露呈の窯体、灰原の延長が予想される尾根状丘陵北側の谷部分（休耕田部分）、尾根状丘陵先端部の石川川側の低地で現況が竹林の部分、以上の3か所である。

地区ごとに任意に基準線を設定し、基準線に従ってトレンチを設定し、調査を行った。遺構を検出したトレンチは随時拡張し、遺構の規模、性格の把握に務めた。トレンチはA~Z、a、bの28か所である。トレンチを設定するための杭は、No.1~No.41である。

また、調査地区への進入路の整備時、谷口部の道上に灰原と思われる黒色土が検出され須恵

器も採集されたので、この地点を窯体、灰原が確認されている地区と区別して、第2地点と名付けた。しかし、第2地点は、北側が畑地南側が崖面で崖下が宅地であるため、トレンチによる調査は行わず地表面の清掃、灰原と思われる黒色土の範囲の実測、須恵器の採集にとどめた。(杭はNo.42・43)

調査は、尾根状丘陵上で灰原の存在が予想される平坦面真上の緩斜面にAトレンチ、平坦面にBトレンチを設定した。また、崖面の窯体が延長していると思われる箇所にCトレンチを設定した。さらに、尾根に沿ってD、E、H、I、J、K、Zの各トレンチを設定した。

また、窯体及び灰原の延長が予想される谷部分(休耕田)にM～Wの各トレンチを設定した。その他、尾根状丘陵南側斜面にL、a、b各トレンチを設定した。また、平坦面真上の緩斜面にF、Gトレンチを設定した。

尾根状丘陵南側直下の低地にX、Yトレンチを設定し、窯跡に関連する遺構の有無の確認を行った。

現地での調査は、昭和62年10月1日から着手し、同年11月12日に終了した。

10月1日から10月7日までは、準備作業、調査用器材の搬入、調査区および周辺の整備、トレンチの設定を行った。

10月8日からA、Bトレンチの調査を開始した。以後、10月14日まで尾根状丘陵に設定したC～Kの各トレンチの調査を行った。また、10月13日に第2地点を確認したため、実測のための杭を設定した。(No.42、43)

10月14日からは、谷(休耕田)部の調査を開始し、M～Wの各トレンチの調査を行った。また、10月21日から尾根状丘陵の南側低地のX、Y両トレンチの調査を開始した。

以上のトレンチは、10月25日までに発掘、実測、写真撮影、遺物取上を終了した。

10月26日からは、A、B、C、D、G、Fの各トレンチの拡張作業を行い、検出した遺構の種類、数量、規模、遺存の状況などの調査した。また、Z、a、b各トレンチを設定し、尾根部及び尾根状丘陵南側斜面部の確認調査を行った。

以上の拡張トレンチ及びZ、a、bトレンチは、11月9日までに発掘作業、遺構の実測及び写真撮影、遺物取上などを終了した。また、第2地点の調査を並行して行った。

また、確認調査と並行して遺跡の地形測量を行った。測量は大建測量設計図に委託して行い、地形測量図にトレンチ設定杭(No.1～43)を記入した。また、仮水準点(KL-1、KL-2)へ水準(標高)の移動を行った。

11月9日及び10日は、谷部のQ、R、S、Tの各トレンチに深掘区を設定し、土層の調査を行った。

以上の確認調査と並行して、調査終了のトレンチ、拡張区を随時埋戻し、11月12日、周辺の清掃、調査用器材の搬出を行い現地における調査を終了した。

整理作業は、昭和62年11月13日から開始し、遺物の水洗、注記、復原作業を12月4日までに終了した。実測、トレース、拓本は昭和63年1月12日までに終了し、1月30日には遺物撮影、挿図、図版、原稿執筆などすべての整理作業を終了し、石川須恵器窯跡の確認調査を完了した。

3 各トレンチの状況

尾根状丘陵のトレンチ (A~L, Z, a, b) (図2・3、図版4~6)

各トレンチの土層は、表土は灰褐色土、地山は小礫を含んだ灰褐色粘土質土である。平坦部の表土は、斜面部に比べてやや厚い。

遺構、遺物は、A~D、F、Gトレンチで検出された。E、H~L、Z、a、bトレンチでは、遺構は検出されず遺物はごく少量であった。また、E、H~L、Z、a、bトレンチは、表土の直下が地山でDトレンチより上方には、窯跡関係遺構が存在しないことが確認された。

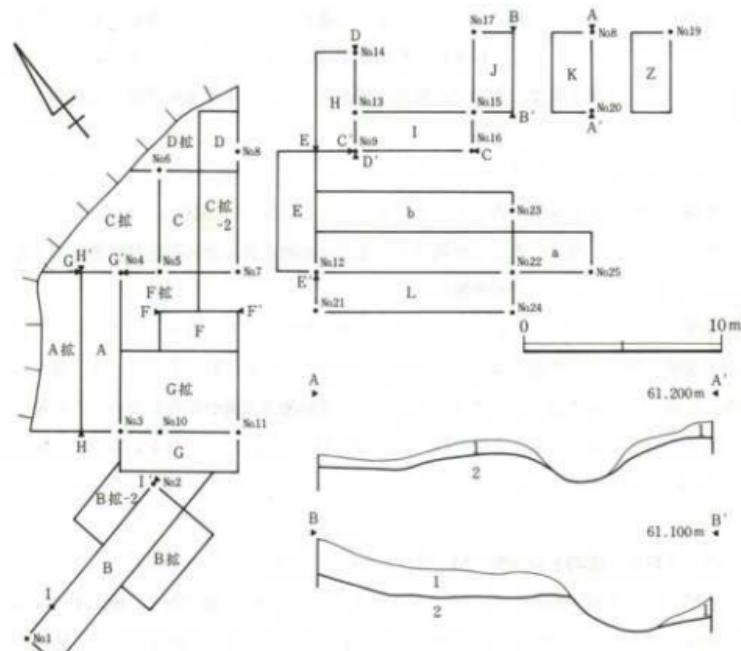
Aトレンチでは、灰原の土層 (G-G', H-H' の1, 2)、Bトレンチでは炭窯跡の焼土 (I-I' の5) が検出された。

谷(休耕田)部のトレンチ (M~W) (図4、図版4)

土層は、最上層が褐色土その下が青灰色粘土の水田の土層である。地山までの深さは、谷中央部でボーリング棒により地表から1.5m以上であることが確認された。休耕田であること、湧水、排土場所の制約などで、トレンチ全体を地山まで掘り下げることはできなかった。よってQ、R、S、T各トレンチに深掘区を設定し、土層の確認を行った。R、Tの深掘区は、湧水のため地山まで深り下げられなかつたが、Q、Sでは地山の青灰色軟質砂岩を確認することができた。土層は図4のC-C', D-D'である。C-C'では、中間に土層の乱れがみられる(3、4層)ので、水田が造り直された可能性がある。地山直上に黒灰色土が確認され須恵器を出土するので、灰原の延長の可能性がある。しかし、須恵器の出土量は少なく小片が多いこと、土層が丘陵から途切れていることから、灰原の土の再堆積である可能性がより大と考えられる。どちらにしても湧水の流水、水田造営などによる擾乱がかなり激しかったようである。

尾根状丘陵南側低地のトレンチ (X, Y) (付図)

調査時の現況は竹林であったがトレンチ調査の結果、水田であることが確認された。また、トレンチの西半部に地山が検出され、状況から尾根状丘陵を削平してできた低地と考えられる。よって、窯跡関係の遺構は存在しないと思われ、少量ではあるが出土した須恵器も丘陵からの流出と考えられる。



A-A' ~ E-E'

1. 表土

(灰褐色土)

2. 地山

(灰褐色粘土質土
小礫を含む)

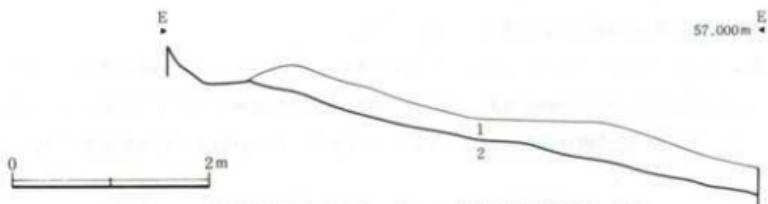


図2 トレンチ配置図(1)(1/300)・トレンチ土層断面図(1)(1/60)

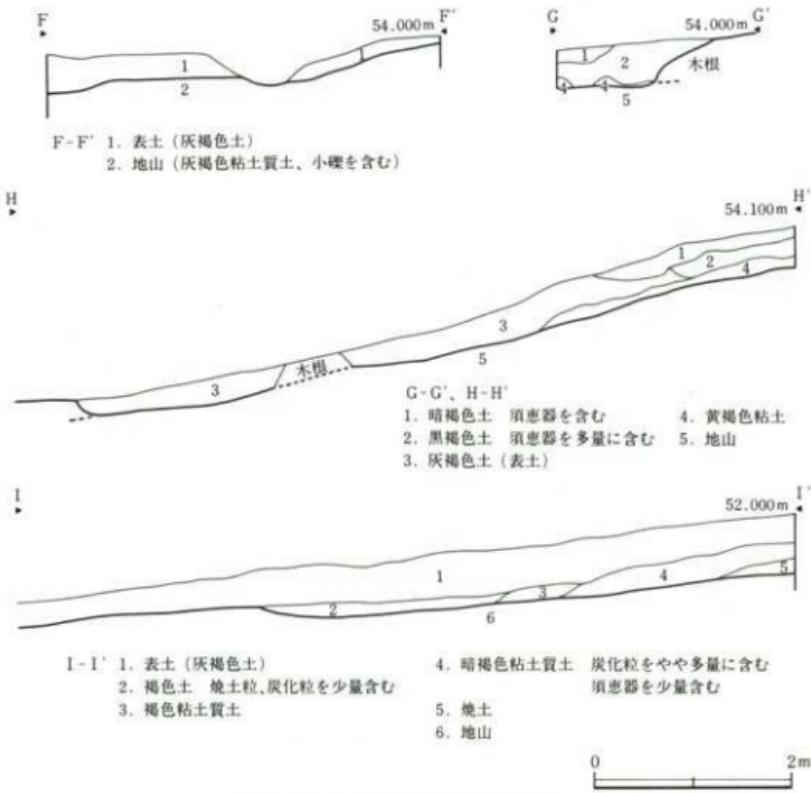


図3 トレンチ土層断面図(2)(1/60)

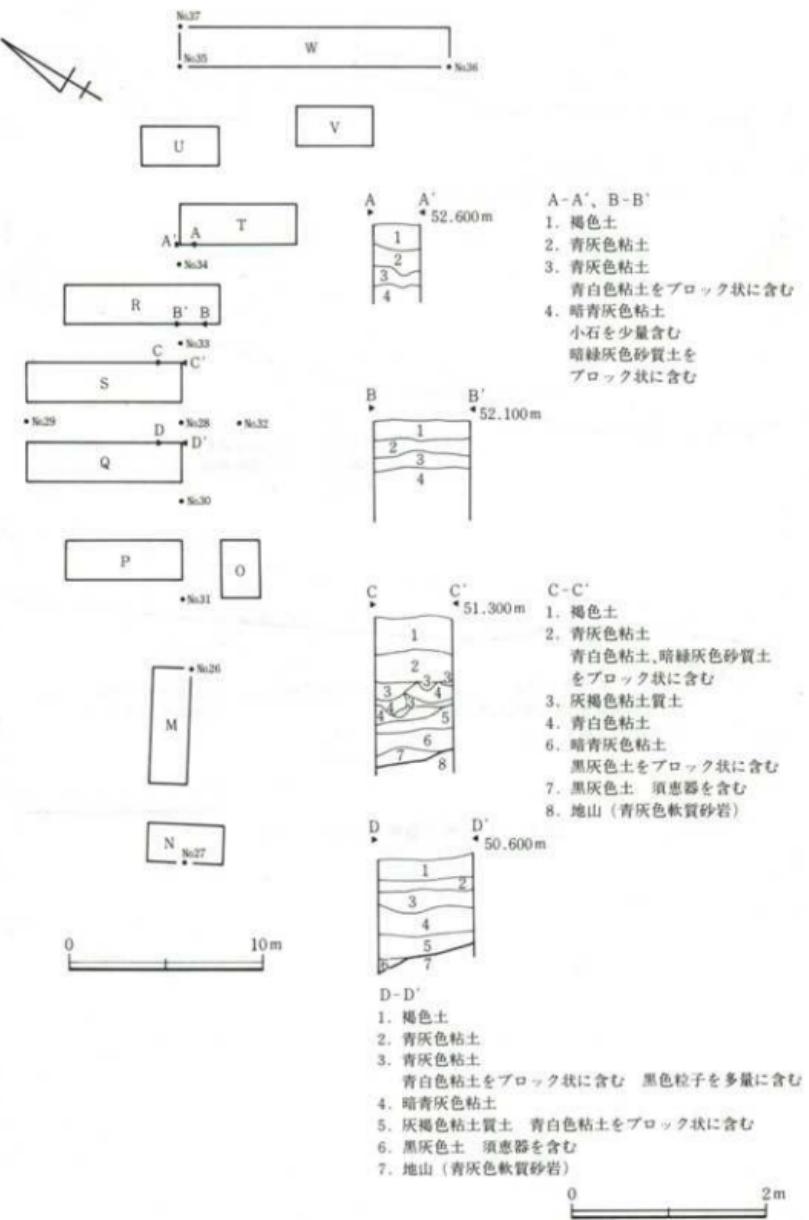


図4 トレンチ配置図(2)(1/300)・トレンチ土層断面図(3)(1/60)

III. 遺構

確認調査によって検出した遺構は、須恵器窯跡3基及び灰原、住居跡1軒、炭窯跡1基、溝状遺構1条である。(図5~7、図版5~9)

1号窯跡 Cトレンチ調査時に窯体の一部を検出、トレンチを拡張して規模、遺存状況を確認した。また、これは道に窯底が露出している。しかし、北側崖面に断面が露出している窯跡ではないことを確認した。

煙道部は道により削り取られているが、窯底の遺存は良い。

窯の構造は窑窓で、窯尻に向ってゆるやかな登り傾斜を示す。検出した部分は焼成部で長さ約4.4m、幅約1.8mである。焼成部、焚口は灰原下になるため不明であるが、D-D'トレンチ西端には検出されていないため全長は7m前後と考えられる。天井部は失われ灰原から窯壁片が多数出土している。窯底及び窯壁の厚さ(焼土化した厚さ)は8~10cmである。窯体の傾斜は約14°である。窯底面までの深さは、焼成室で検出面から約40cmである。焼成の回数は、窯底の状況を確認できなかつたので不明確であるが、検出面での窯壁には補修がみられず、回数は少なかったと考えられる。また、窯跡の覆土には多量の須恵器が含まれ、焼成時に天井が崩落した可能性が強い。

灰原 調査を行った灰原は1号窯跡のものである。崖に沿ってほぼ平行に広がっている。残存の規模は長さ約6.2m、幅約3mで、灰層の厚さは、焚口付近で約70cm、斜面下端で約30cmである。黒色または黒褐色を呈し、須恵器を多量に含んでいる。また、崖により北半分及び西端部が消失しているため、実際の規模は現在の約2倍の範囲をもっていたと考えられる。

2号窯跡 丘陵の北側崖面に断面が露出している窯跡の2基のうち東側を2号窯跡、西側を3号窯跡とした。両方とも1号窯跡及び1号窯跡灰原と重複している。表土を除去した状況により1号窯跡よりも古いことが確認された。崖面の窯体が幅約1mであるため、遺存している部分は煙道部付近と推定される。規模、遺存状況の確認のため崖面に平行して小トレンチD-D'を設定し調査を行った。D-D'に窯体が検出され、幅約1mで煙道部は1号窯跡下になると考えられる。また、E-E'の土層4、5は2号窯跡の覆土及び窯底と考えられる。4には須恵器が露出している。また、補修痕はみられない。

3号窯跡 2号窯と同様に1号窯跡よりも古い。崖面に窯体が露出しているが、D-D'には明瞭な窯体は検出されなかった。しかし、1号窯跡の焚口付近にあたり、1号窯跡の操業時に破壊された可能性が強い。D-D'の土層6が2号窯跡のものと考えられる。1号窯跡の灰原により削平され、窯底のみの遺存である。E-E'の土層6で、遺存が悪いため補修の有無は不明である。

住居跡 尾根状丘陵の先端平坦部に検出された。木の根、炭窯跡による擾乱をうけ遺存は悪

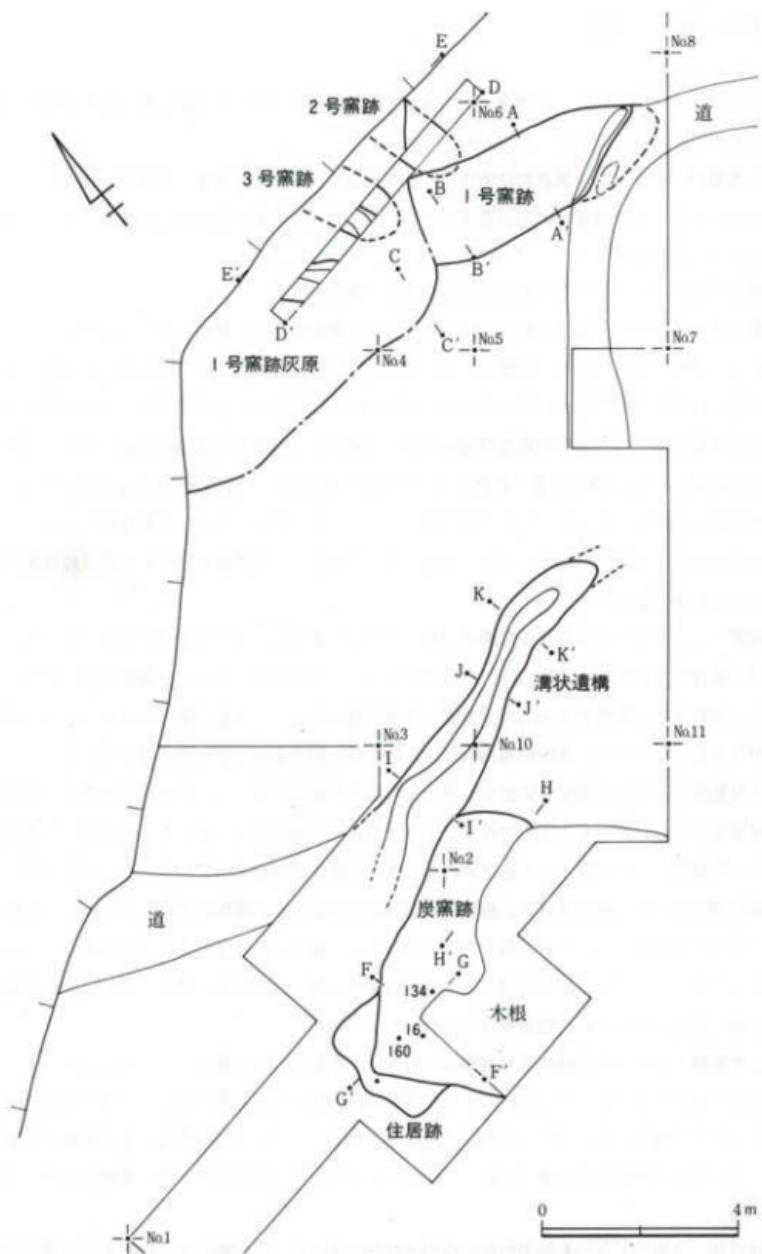


図5 遺構配置図 (1/120)

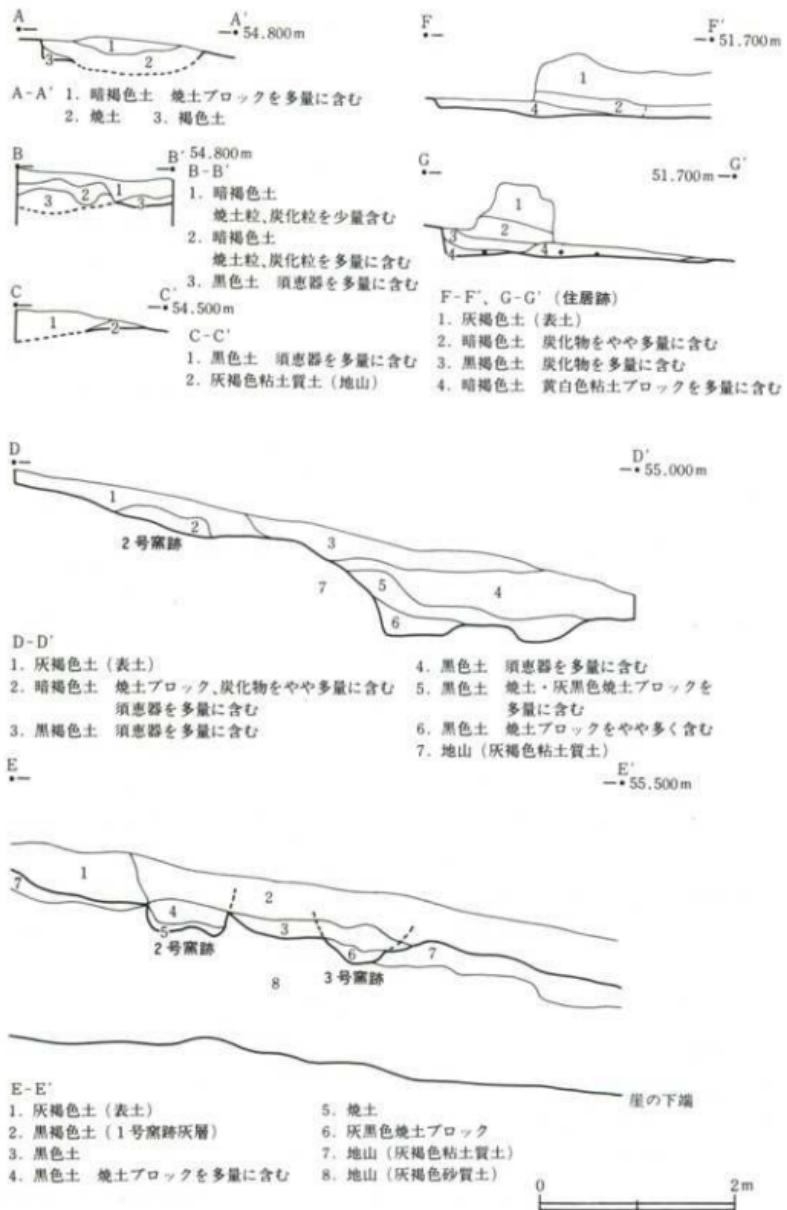


図6 遺構土層断面図(1) (1/60)

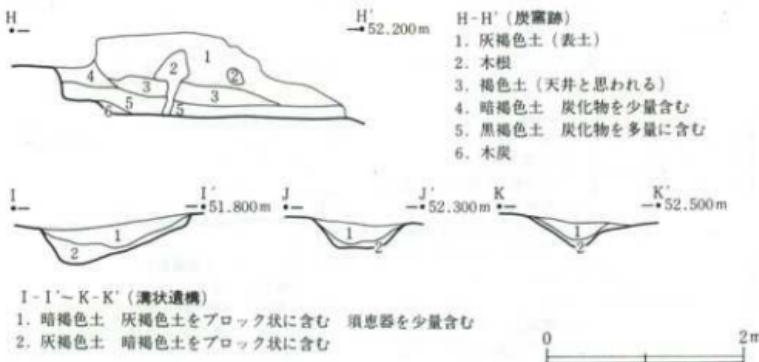


図7 遺構土層断面図(2) (1/60)

い。カマドは西壁にあり、焼土の散布が見られる。小トレンチを十文字に設定し土層、床面までの深さ、床面の状況を観察した。床面までは約10cmと浅いが、床面直上に黄白色粘土の堆積がみられ工房跡と考えられる。平面形は1辺約2.6mの隅丸方形と考えられる。出土遺物は須恵器で1号窯の須恵器とほぼ同型である。

炭窯跡 住居跡と重複して検出された。木の根により南半部は不明であるが、検出した平面形は、長径6m、短径4mの卵形であるが実際の規模はこれよりも小さいと考えられる。全体に焼土、木炭粒が散布している。遺物は木炭のみで年代は不明であるが、かなり新しいと考えられる。最近まで周辺で炭焼が行われ、尾根状丘陵南側斜面には、炭窯跡が露呈している。杭No.25付近の落ち込みのマークが露出している炭窯跡である。

溝状遺構 窯跡群の南側、炭窯跡に隣接して検出された。東西方向に走る溝で尾根に平行している。幅は1.0~2.4m、深さ0.4mで、下端ほど広く深くなる。覆土に少量の須恵器を含み、他の遺物はない。下端は、住居跡、炭窯跡に接するため調査ができなかった。また、上端部は、浅くなり、検出面では一時消滅するが、さらに上方へ続く可能性もある。

第2地点 (図8、図版14) 第2地点では、借地の関係で表面的な確認調査を行った。尾根上丘陵先端、標高約41mの地点である。尾根づたいの道の部分で、畑への通路になっている。丘陵を削り、谷を埋めて畑(元は水田)を造営したと考えられる。道は畑の南側にあり、道の南は丘陵が残っている。道跡への進入道として清掃中に灰原と思われる黒色土および須恵器を検出し、周辺を清掃し地表からの遺構確認を行った。しかし、灰原と思われる黒色土の範囲を確認できたのみであった。道の南側の丘陵斜面には窯体および灰層は検出されなかつたので、畑

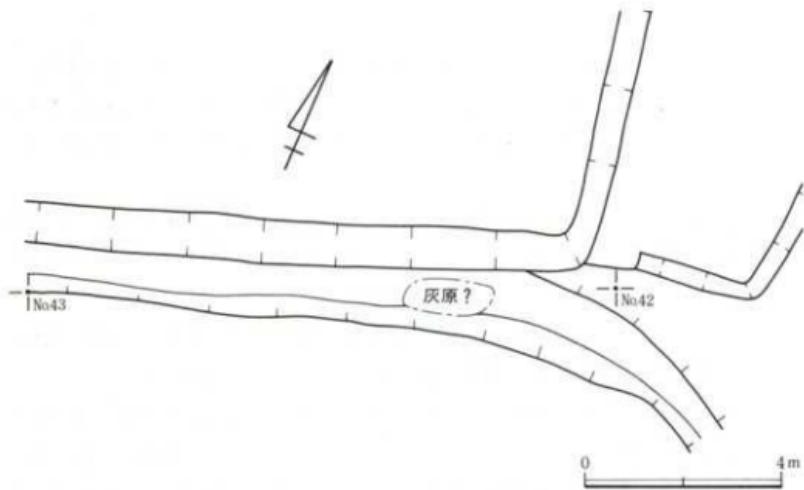


図8 第2地点 平面図 (1/120)

下に遺構が存在する可能性が大である。これは、窓の側溝からも須恵器が採集されていることからも推定できる。道部分はボーリング棒による地下の探査も行ったが、窓体及び灰原は確認できなかった。

IV. 遺 物

出土遺物はすべて須恵器である。出土量は、窯跡及び灰原が最も多い。また、住居跡内、谷部深掘区、第2地点からも少量出土している。また、崖面に露出した窯体の断面実測のための清掃時に、かなりの量の須恵器を採取しているが、これは、ほとんどが1号窯跡の灰原のものである。

須恵器の器種は、壺（無高台）が最も多い。他に、高台付壺、壺蓋、甕、長頸壺、瓦、器種不明品があるが、出土量は少ない。とくに、甕、長頸壺は数点、瓦は1点のみの出土である。（図9～16、図版10～21）

壺 壺（無高台）は、底部の調整から大きく3種類に分類される。回転糸切り離し無調整、回転糸切り離し周辺回転ヘラケズリ調整、全面回転ヘラケズリ調整の3種類である。

1～71は、回転糸切り離し無調整の壺と考えられる。口縁部のみのものもあるが、形状から回転糸切り離し無調整の壺とした。ロクロの回転はすべて右回転である。強弱の差はあるが、底部と体部との境に指を差し入れた跡が認められる。このため、底部と体部との境が体部下端よりも薄くなる傾向がある。体部はやや内湾して立ち上がり、口縁部は、ほとんどが、ほぼ直線的になるか、わずかに外反する。また、数は少ないが、口縁部が、わずかに内湾するものも認められる。火ダスキが認められる壺もみられるが、焼成の技法の痕跡として、全ての壺に火ダスキが現れる可能性がある。

1～14は、体部の開きがやや大きく、高さが口径、底径に比べてやや低い傾向がある壺である。また、体部上半部から口縁部にかけて、厚さが比較的明瞭に薄くなる傾向にある。口縁部は直線的であるが、やや外反する。4は、図版15の4にみられるとおり火ダスキが認められるが、更に火ダスキの原因になったワラ状のものの圧痕が確認される。口径12.0～15.2cm、底径6.0～8.4cm、器高3.1～3.8cmである。

15～24は、1～14と同様に体部の開きがやや大きく、体部上半部が薄くなる傾向がある。しかし、器高が比較的高く全体にやや大振りである。口縁部は直線的であるが、やや外反する。口径12.0～14.0cm、底径5.9～8.4cm、器高3.9～8.4cmである。

25～29は、体部の開きが比較的小さいものである。口径と底径の差が比較的少ない傾向にある。体部上半部が薄くなる傾向があり、口縁部は直線的か、やや外反する。口径12.0～13.0cm、底径6.6～8.6cm、器高4.0～4.3cmである。

30～36も、体部の開きが比較的小さいものである。口径、底径に比べて器高はやや高い傾向がある。また、底部と体部との境の指を差し入れ跡が深いため、体部の開きが小さい割に、口径と底径の差は大きい。口径12.4～13.2cm、底径6.2～7.4cm、器高4.3～4.8cmである。

37～40は、体部の開きがやや大きく、高さが口径、底径に比べてやや低い傾向がある。体部

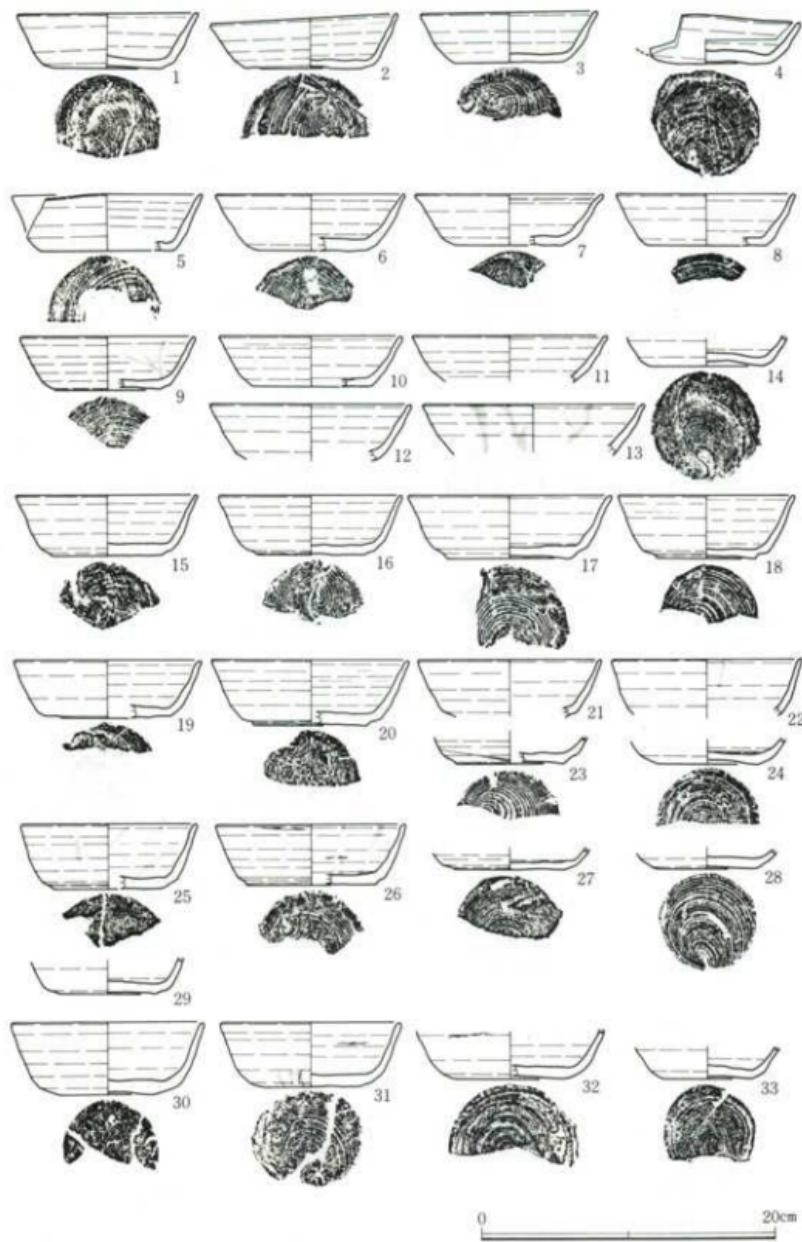


図9 遺物実測図(1) (1/4)

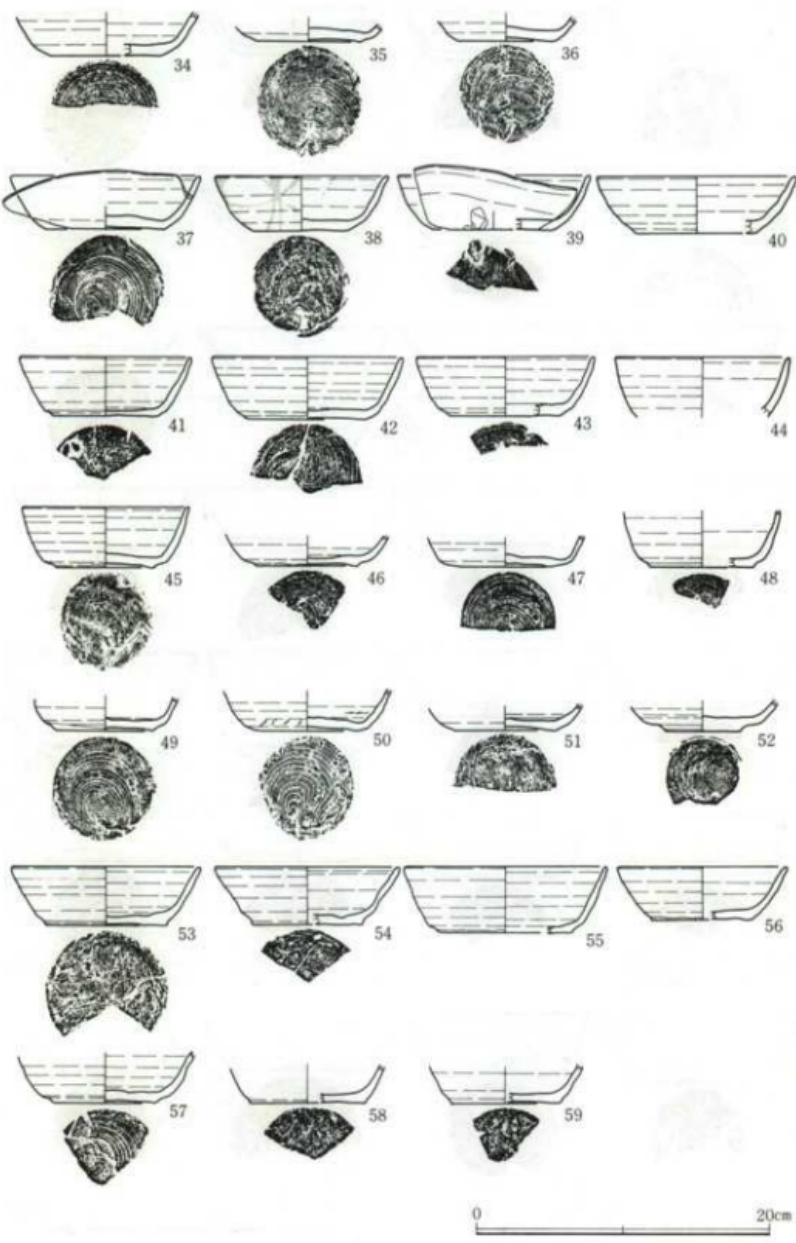


図10 遺物実測図(2) (1/4)

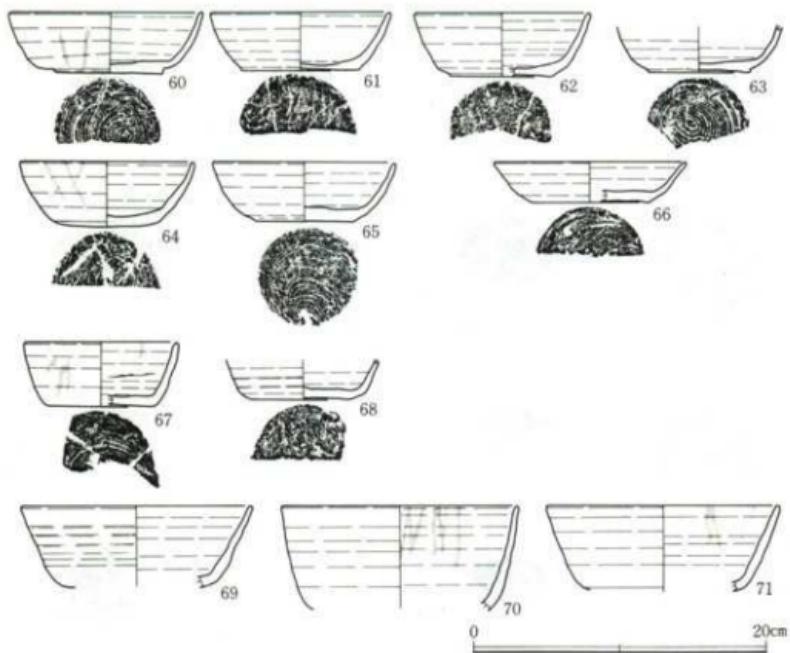


図11 遺物実測図(3)(4)

の厚さの変化は少なく、口縁部は直線的か、やや内寄する。口径12.0~13.6cm、底径6.4~8.2cm、高さ3.5~3.7cmである。

41~44は、37~40と同様に、体部の開きがやや大きく、体部の厚さの変化も少ない。器高は比較的高く、口縁部は直線的か、やや内寄する。口径11.8~13.2cm、底径7.2~7.8cm、器高3.9~4.1cmである。

45~52は、体部の開きがやや小さいと考えられる。45は、口縁部がやや薄くなり、わずかに外反しているが、体部の厚さの変化は少ない。また、口径と底径との差も比較的小ないと考えられる。口径11.7cm、底高6.4~7.0cm、器高4.0cmである。

53~59は、体部の開きが比較的大きく、ほぼ直線的に立ち上がる傾向がある。口縁部は直線的か、やや外反する。また、体部中央が上下に比べて厚くなる傾向がある。底部と体部との境への指の差し入れは、比較的浅いが、明瞭な円板状の底部を呈している。口径12.8~14.0cm、底径7.0~9.0cm、器高3.6~4.4cmである。

60~63は、体部の開きが比較的大きく、やや内寄している。明瞭な円板状の底部を呈し、底部中央の厚さが薄くなる傾向がある。口径12.2~13.2cm、底径7.0~8.2cm、器高3.8~4.2cmで

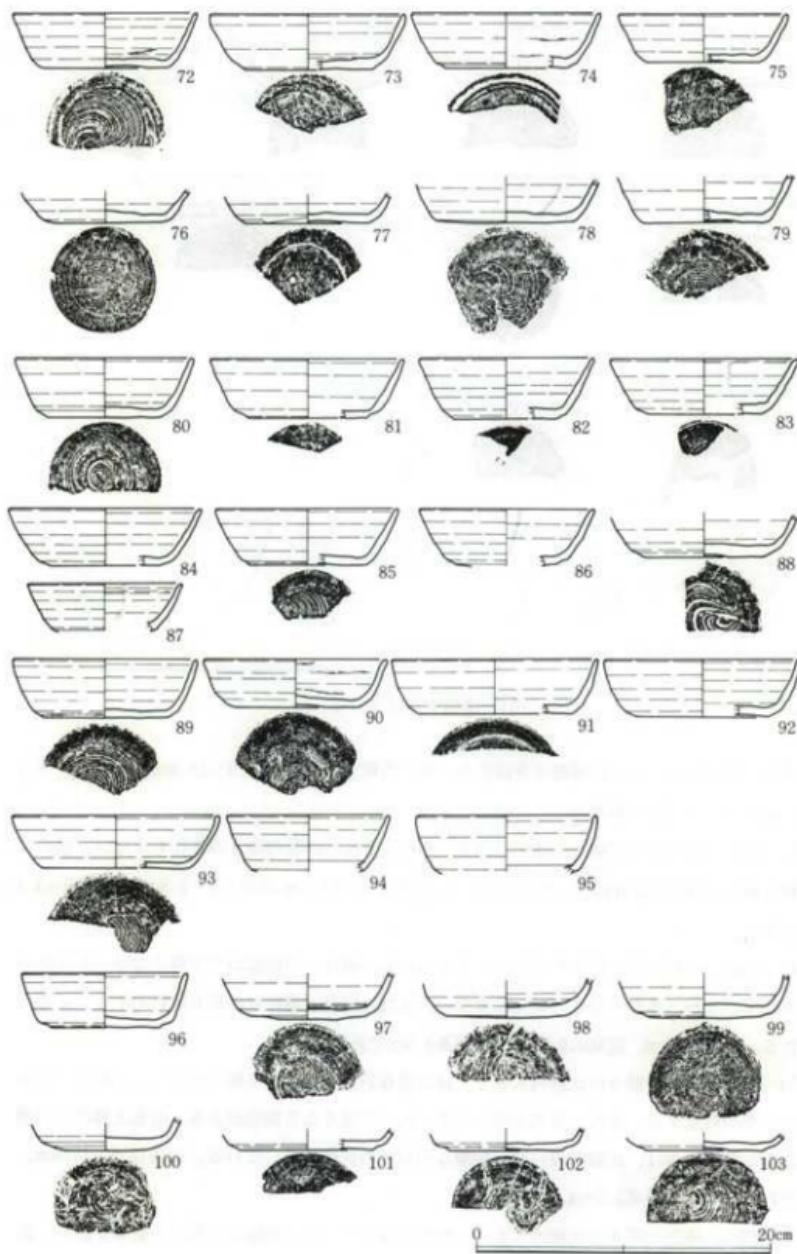


图12 遗物実測図(4) (1/4)

ある。

64、65は、全体に丸みのある壺である。体部は内弯して立ち上がり、ゆるやかに内弯しながら口縁部に至る。口縁部はわずかに内弯する。体部上半部で、厚さがやや薄くなる。口径12.0~12.6cm、底径6.6~7.2cm、器高3.9~4.3cmである。

66は、皿に近い形状を示す。体部はやや内弯しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。

67、68は、体部の開きが小さく、口径と底径の差が比較的小さい。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。体部の厚さの変化は少ない。口径10.6cm、底径6.8~7.4cm、器高4.3cmである。

69~71は、やや大型の壺である。底部を欠損しているため、底部が回転糸切り離し無調整かどうかは不明である。69は体部の開きが大きく、70は体部の開きが小さい。口径に比べて器高が高いと考えられ、底部に高台が付く可能性もある。口径15.8~16.4cmである。

72~107は、回転糸切り離し周辺回転ヘラケズリ調整の壺である。底部を欠くものもあるが、体部下端の状態から回転糸切り離し周辺回転ヘラ削りの壺とした。ロクロ回転はすべて右回転である。回転糸切り離し無調整の壺と同様に、底部と体部との境に指の差し入れ跡が認められる。また、回転ヘラケズリのため、差し入れ跡が削り取られたものもみられる。体部はやや内弯して立ち上がり、口縁部は、ほとんどが、ほぼ直線的になり少數ではあるが、わずかに外反するもの、わずかに内弯するものがみられる。火ダスキが認められるものもある。体部の開き（口径と底径との差）は、回転糸切り離し無調整の壺よりも比較的小さい。

72~79は、口径、底径に比べて器高がやや低い傾向がある。体部の厚さの変化は小さい。口径11.6~13.4cm、底径7.0~9.2cm、高さ3.2~3.7cmである。

80~88は、器高が比較的高いものである。体部はほぼ直線的で、厚さの変化は小さい。口縁部はほぼ直線的か、わずかに外反する。口径10.6~13.4cm、底径6.8~8.2cm、器高3.2~3.9cmである。

89~95は、口径、底径がやや大きく、口径、底径の差が小さいものである。器高は、口径、底径の差が小さいものである。器高は、口径、底径の割に低くなる。底部と体部との境の指の差し入れ跡は、回転ヘラケズリのため不明瞭である。体部はやや内弯し、口縁部は、ほぼ直線的なもの、わずかに外反するもの、わずかに内弯するものがある。体部の厚さの変化は小さい。口径11.2~14.2cm、底径8.4~10.6cm、器高3.2~3.9cmである。

95~105は、体部の開きがさらに小さいものである。体部および口縁部は直線的である。口径11.4cm、底径5.4~9.0cm、器高3.6cmである。

106は、やや大型である。器高が高く、体部、口縁部はほぼ直線的である。底部が欠損しているので、高台が付く可能性もある。

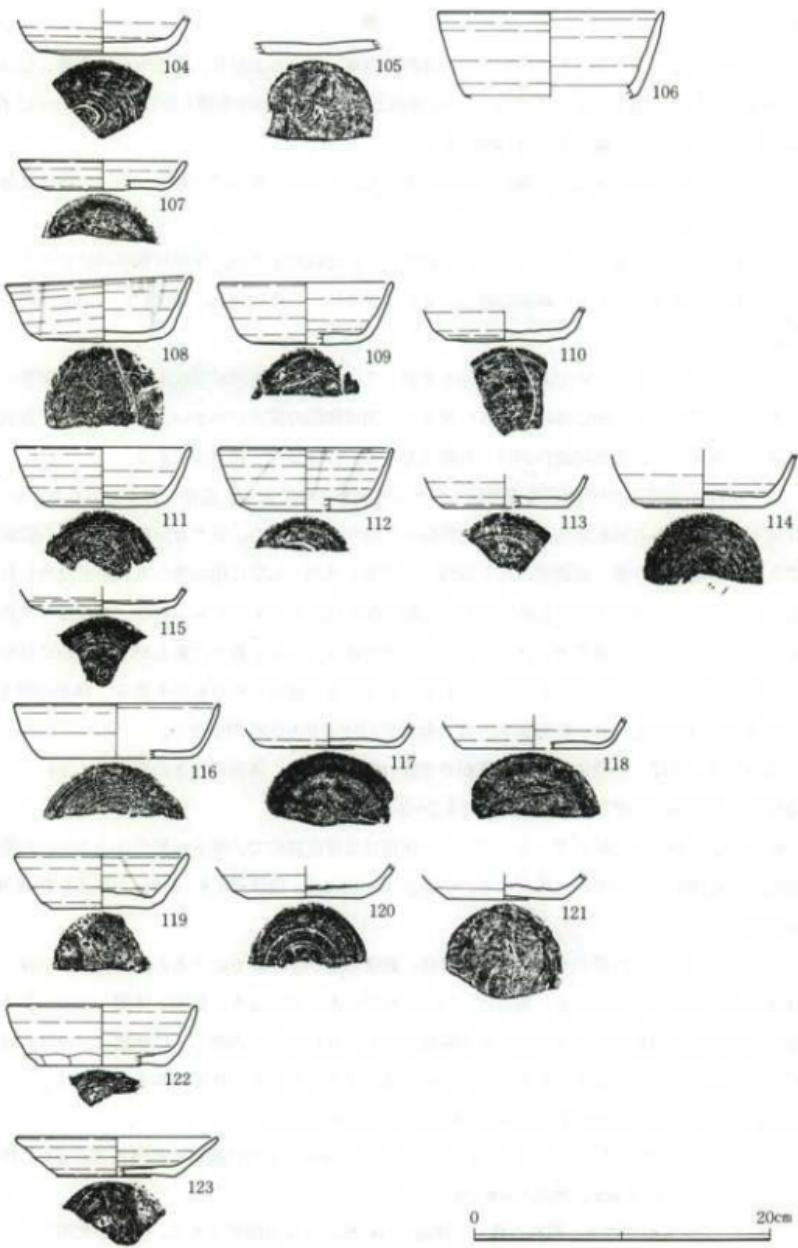


図13 遺物実測図(5) (1/4)

107は、皿に近い形状を示す。体部、口縁部は直線的である。口縁の摩耗が激しく坏の体部上半が欠損したものとも考えられるが、口縁と思われる部分がほぼ水平になるため、皿状の坏とした。

108～123は、全面回転ヘラケズリ調整の坏である。出土量は比較的少ない。ロクロの回転はすべて右回転である。底部と体部との境に指を差し入れた跡が認められるが、回転ヘラケズリのため、不明瞭になっているものもある。体部は、外傾してほぼ直線的に立ち上がるものが多いため、ゆるやかに内寄するものもある。口縁部はほぼ直線的である。また、全面回転ヘラケズリの跡、周縁部を再度回転ヘラケズリを施したものもみられる。(118、119、110、117)火ダスキーの認められるものもある。

108～110は、体部の開きがやや大きなものである。体部、口縁部はほぼ直線的で、体部の厚さの変化は小さい。口径12.0～12.7cm、底径7.4～8.2cm、器高4.1～4.3cmである。

111～115は、体部の開きがやや小さいものである。体部、口縁部はほぼ直線的である。口径12.0cm、底径7.2～8.4cm、器高3.9～4.1cmである。

116～118は、口径、底径がやや大きく、器高が比較的低いものである。器厚は全体に薄く、口径、底径の差は小さい。口径14.0cm、底径9.0～10.2cm、器高3.6cmである。

119～121は、体部の開きが大きなものである。体部、口縁部はほぼ直線的である。120、121は、体部下端に回転ヘラケズリが施される。口径11.8cm、底径6.6～8.0cm、器高3.6cmである。

122は、体部下端に静止ヘラケズリが施される。

123は、皿状の坏である。体部は大きく開いて立ち上がり口縁部までほぼ直線的である。

高台付坏 124～145は、高台付坏である。底部を欠くものもあるが、形状から高台付坏とした。底部の調整は、全面回転ヘラケズリのもの(124、130、135、137、138、140)、回転糸切り痕を残すもの(125、127、128、132、133、134、136、140)がある。ロクロの回転はすべて右回転である。大小の2種類があり、器形はほぼ同形である。底部から体部が外傾して直線的に立ち上がる。体部、口縁部はほぼ直線的である。口径、底径に比べて器高が高い。高台は、「ハ」字状に直線的にひろがり、端部は小さく外反し、やや厚くなるものが多いが、わずかに内寄するもの(137、140)、高台の小さいもの(139)がある。また、火ダスキーが認められるものもある。小型のものは、口径10.6～11.4cm、底径6.2～8.4cm、器高4.9～5.2cm、大型のものは、口径13.8～17.6cm、底径8.2～10.4cm、器高6.4～7.8cmである。

146は、盤と考えられる。体部は大きくひろがり、口縁部が短く立ち上がり口縁が小さく外反する。口縁内面には回転ヨコナデが施される。

蓋 147～159は、蓋である。口径及び出土量から高台付坏に伴うものと考えられる。丸味のある天井部を有し、端部を内側へ屈曲させている。天井部は、回転ヘラケズリが施され、擬宝珠様のつまみが付く。火ダスキーが認められるものもある。147、148は、天井部の丸味が大きく、

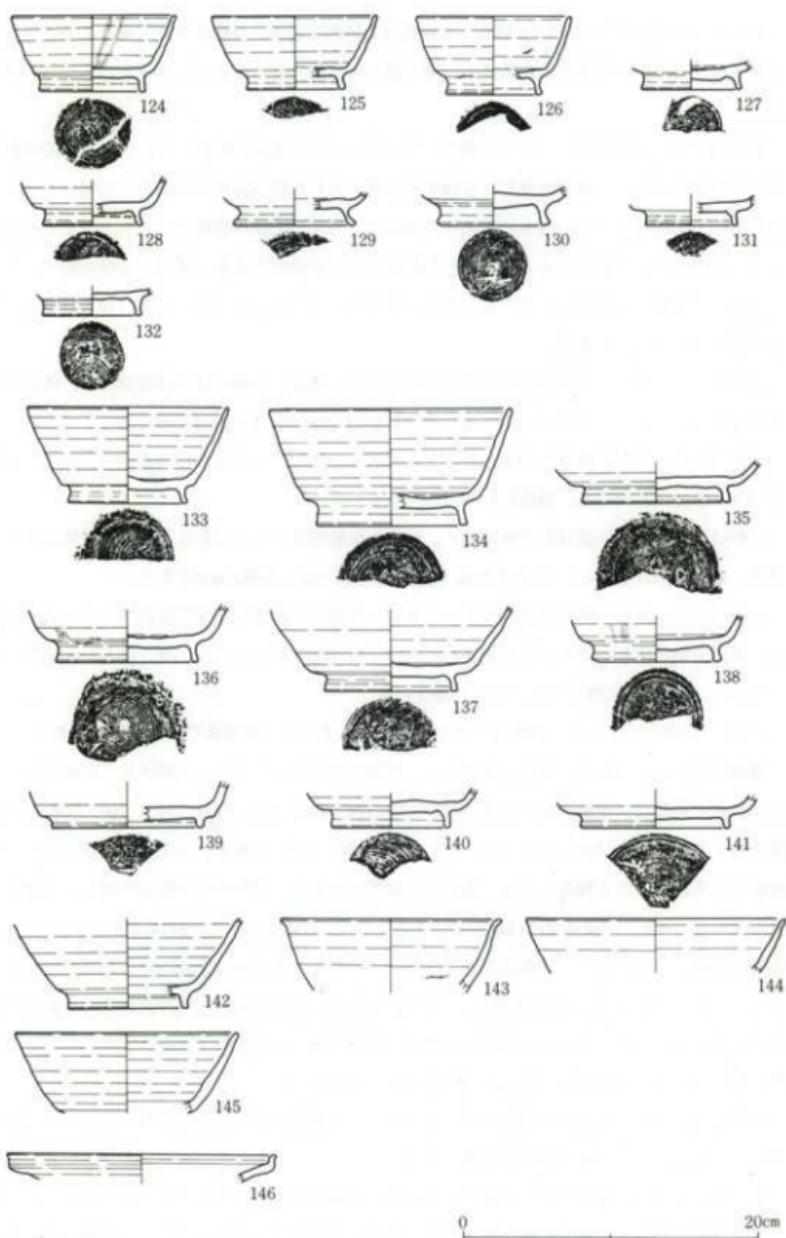


図14 遺物実測図(6) (1/4)

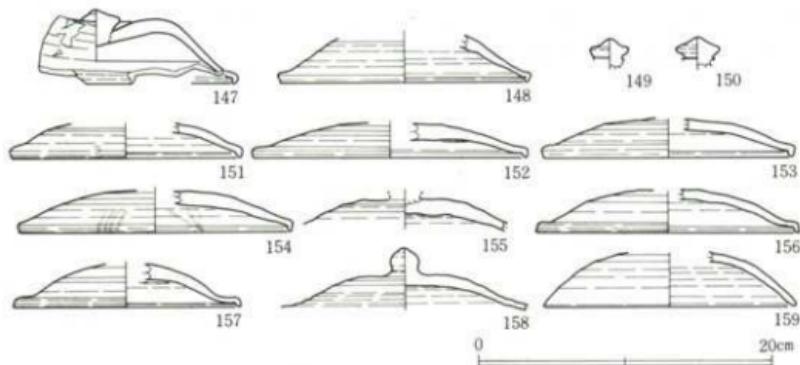


図15 遺物実測図(7) (1/4)

やや扁平な擬宝珠様のつまみが付くと考えられる。149、150がこれに伴うつまみと思われる。151～155は、天井部がやや平坦になる。端部の屈曲はほぼ垂直である。156、157は、周縁部でほぼ水平になり、端部の屈曲は小さく外反する。158は、丸味のある擬宝珠様のつまみを有する。159は、端部の屈曲が認められないものである。天井部に回転ヘラケズリが施される。

甕 160～169は甕である。

160～164は広口の甕と考えられる。160は、口縁部が外反して立ち上がり、口縁は断面「コ」字状になる。胴部下半部に回転ヘラケズリが施される。161は、明瞭な頸部をもって口縁部が外反して立ち上がる。口縁はややくぼんだ断面「コ」字状になる。162は底部で回転ヘラケズリが施される。163は胴部下半部でヘラケズリ、調整痕と思われる擦痕が施される。164は胴部片で回転ヘラケズリが施される。

165～169は、叩き目を有する甕片である。167、169は、ヨコナデにより叩き目が消されていく。165、166は、胎土が他に比べて精緻であるので、本窯跡産のものではない。

長頸甕 170～172は、長頸甕である。170は、胴部片で上半部に回転ヘラケズリが施される。171は、口頸部である。円筒状の頸部から口縁部が外反し、口縁が小さく直立して、断面が三角形を呈する。胎土が他に比べて精緻であるので、本窯跡産のものではないと考えられる。172は、底部片である。幅広の高台をもち、回転ヘラケズリが施される。

瓦 173は、瓦片である。瓦片はこれ1点のみの出土である。平瓦の側端部である。側面に切り離しの跡が残り、表裏とも叩き目、布目などの跡は認められない。

不明品 174は、不明品である。高台状のものでナデ調整が施される。

胎土は、一部をのぞいて器種が異っても同じと思われる。手ざわりは、やや砂っぽいがかなり精製されている。また、白色微粒子、白色針状物、黒色微粒子がみられる。

また、16、134、160は住居跡の覆土からの出土、105、115、142は第2地点の出土である。
図版26の参考1は壙の癒着資料、参考2は窓壁片である。

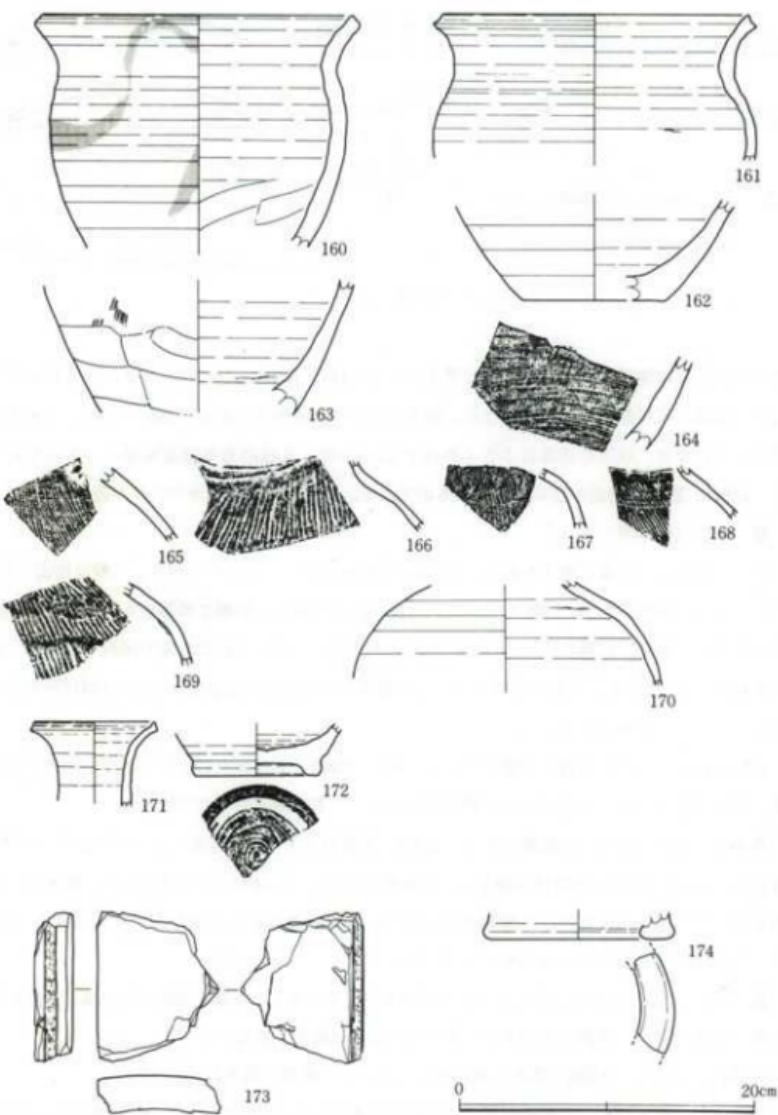


図16 遺物実測図(8) (1/4)

V. まとめ

石川須恵器窯跡は、千葉・南總中学遺跡報告書⁽⁸¹⁾に出土須恵器が紹介されて以来、市原市永田・不入窯跡とともに、千葉県における数少ない須恵器窯跡の一つとして知られている。また、探集された須恵器の検討により、永田・不入窯跡から石川須恵器窯跡へ継続して8世紀第3四半期から9世紀第2四半期にかけての須恵器窯の操業が明らかにされ⁽⁸²⁾、房総における奈良・平安時代土器の研究に影響を与えていている。

今回の調査では、窯跡の数、分布範囲、窯跡の規模、遺存状況を確認した。また、出土須恵器から主な器種を明らかにすることができた。

窯跡 窯跡は3基検出されている。すべて須恵器窯跡であるが、窯跡と灰原がともに遺存しているのは1号窯跡だけである。また、2、3号窯跡が1号窯跡と重複していることが明らかになり、操業年代に時間的な幅があることが確認できた。従来、瓦、須恵器併焼窯⁽⁸³⁾の可能性も考えられた。しかし、今回の調査で瓦は、平瓦片が1点検出されたのみである。瓦窯跡とすれば大量の出土が考えられるので、本窯跡は、ほぼ須恵器のみを焼成したと考えてよいと思われる。

窯跡は、3基集中して検出され第2地点以外では、尾根状丘陵上に窯跡が存在しないことがほぼ確認できた。

窯体構造 窯跡の遺存状況は、良いとはいえない状態である。1号窯跡は、検出面から窯底面までの深さが約40cmで煙道部は、道によって削り取られている。窯体の構造としては、窖窯⁽⁸⁴⁾である。規模は、焼成部の長さ約4.4m、幅約1.8mである。全体の規模は長さ7m前後と考えられる⁽⁸⁵⁾。窯底の傾斜は、焚口と焼成部との深さの差から約14°と推定される。窯底面の状況は、窯体内の調査を行っていないので不明であるが、永田・不入窯跡と同様に無段と考えられる。

2、3号窯跡は、煙道部付近のみの遺存である。1号窯と同じ窖窯である。1号窯とその灰原によって一部破壊されているが、崖面に露呈した断面によりトンネル状の窯体がよく観察される。

灰原 確認された灰原は、1号窯跡の灰原である。2、3号窯のものは、谷部に埋没していると考えられたので、谷部に深掘区を設定して調査を実施した。しかし、須恵器を含んだ黒灰色土を地山直上に検出したが、灰原と断定するには至らなかった。

住居跡 尾根状丘陵の先端平坦部に1軒検出された。炭窯跡との重複で遺存は良くない。カマドをもつと考えられ、出土須恵器から窯跡とほぼ同時期と考えられる。床面直上から黄白色粘土の堆積が検出されている。住居跡全体の発掘調査は実施しなかったが、窯跡に伴う工房的な住居跡である⁽⁸⁶⁾。

炭窯跡、溝状遺構 本遺構は、窯跡よりもかなり後世のものと考えられる。炭窯跡は、住居跡との重複から住居跡よりも新しく、周辺に同型と思われる炭窯跡が露呈しているので、ごく最近のものと考えられる。溝状遺構は、須恵器を少量出土するのみで明確な時期は不明である。

第2地点 地表面の調査しか行えなかったが、地下に窯体もしくは灰原が遺存している可能性がある。検出した須恵器から時期はほぼ同じと考えられる。

須恵器 出土した須恵器は、ほとんどが壺（無高台）である。他の器種は、高台付壺、蓋、甕、壺、瓦、不明品である。

壺は、底部回転糸切り無調整のものが大半を占める。また、法量は、ほぼ一定の範囲内⁽⁴⁷⁾におさまると考えられる。これは、窯跡の遺存に関係があると思われる。窯体、灰原ともほぼ遺存しているのは1号窯跡のみであるので、出土した須恵器もほとんどが1号窯跡のものと考えられる。また、1号窯跡は、窯底の露出部分により多数にわたる焼成は考えられないで、ごく短期間の操業と考えられる。よって、出土須恵器の器種、器形が限られたものになったと考えられる。また、石川須恵器窯跡群としての操業期間の中で1号窯跡の操業期間は、ごく限られた時期と考えられる。しかし、生産された須恵器の型式としての期間と、1号窯跡の操業期間が完全に一致するとは考えられないので、1号窯跡が生産したと考えられる須恵器は、型式としては、1号窯跡の操業期間以上に存続していたと考えるのが妥当と思われる。

瓦 平瓦片1点のみの出土である。1号窯跡の灰原出土であるが、1号窯跡では焼成したものではないと考えられる。しかし、2、3号窯跡で焼成した可能性もあるが、他に瓦の出土がみられない（谷部の調査でも）ので、瓦は焼成していないかたと考えられる。よって、出土した瓦は、窯跡の付属品（焼台など）の可能性が強い。

また、永田・不入窯跡との関係は從来どおり永田・不入窯跡から石川須恵器窯跡へという流れが考えられる。しかし、製品に類似し、同じ上総国で位置も近接していることから、両者を同一の窯跡群内の一地区と考え検討を加えることが、須恵器生産を考える上でより理解しやすいと思われる。

年代 本窯跡の操業年代としての下限は、9世紀第2四半期が与えられている⁽⁴⁷⁾。今回の調査で3基の窯跡が確認されたが、主要と考えられるのは1号窯跡である。そして1号窯跡は、3基の中で最も新しい窯跡である。よって1号窯跡の操業年代は9世紀前半代となる。須恵器としては、底部回転糸切り無調整の壺が典型的なものである。この型の壺は、実測図との比較ではあるが、市原市坊作遺跡のII期及び君津郡袖ヶ浦町遠寺原遺跡のII期に含まれていると考えられる⁽⁴⁸⁾。これらの時期は、8世紀第4四半期～末葉である。よって、1号窯跡は8世紀末葉には操業が行われていた可能性もある。

以上、確認調査という限られた調査ではあるが、窯跡の確認、出土須恵器の内容がほぼ明らかになったと考えられるが、操業年代、須恵器の編年上の検討はこれからと思われる。

また、窯跡の遺存状況は良くなく群としての規模も小さいため、保存については特に注意を払うべきであり、本格的調査を行う場合はより周到な準備が必要である。

(注)

- (1) 酒井清治 「石川窯跡」「千葉・南總中学遺跡」 市原市教育委員会 昭和53年
- (2) 佐久間 豊 井口 崇 「千葉県市原市石川窯址における表面採集の須恵器」『史館』第16号 昭和59年
- (3) 瓦片が表面採集されている。
- (4) 中村 浩 「窯業遺跡入門」考古学ライブラリー 13 ニュー・サイエンス社 昭和57年
須恵器窯の構造の種類としては、地下式、半地下式、地上式がある。地上式は、特殊な窯をのぞいて、須恵器窯にはない。地下式は寄窯である。半地下式は、地下式の中に含まれると考えられる。
- (5) 窯体の規模としては、永田1号窯跡の第1次窯跡が全長約6m、焼成部長約4.2m、焼成部幅約1.9m、傾斜約20°、第2次窯跡は、焼成部長約3.9m、幅約1.65m、傾斜約25°、第3次窯跡は、焼成部3.2m、幅約1.5m、傾斜約25°である。永田5号窯跡の最終時が、全長約8m、焼成部長約5m、焼成部幅約1.5m傾斜は10~15°である。
- (6) 工房跡的な住居跡を検出した窯跡は、御殿山地区62号窯跡第II地区（服部敬史「南多摩窯址群」御殿山地区62号窯址発掘調査報告書 八王子バイパス鋪水遺跡調査会 昭和56年）新久窯跡B地点（板詰秀一編『武藏新久窯跡』雄山閣出版 昭和59年 復刻）がある。
御殿山地区62号窯跡第II地点のものは、4.3×3.4mの隅丸長方形である。カマドを有し、床面に3個のピットが検出され、粘土の堆積が認められる。
新久窯跡B地点のものは、5.4×4.5mの隅丸長方形である。カマドを有し、粘土の堆積が認められる。
- (7) (2)に同じ
- (8) 田所 真 「市原市坊作遺跡(旧市原郡)」、 笹生 衛 「君津郡袖ヶ浦町遠寺原遺跡(旧望陀郡)」『房総における歴史時代土器の研究』 房総歴史考古学研究会 昭和62年

出土遺物

| 番号 | 器種 | 遺存度 | 法量 | | | 色調 | 機成 |
|----|----|-------|--------|-------|-------|------|------|
| | | | 口径 | 底径 | 器高 | | |
| 1 | 环 | 3/2 | 12.4 | 7.2 | 3.7 | 暗灰色 | 良好 |
| 2 | II | 3/2 | (12.7) | 6.6 | 3.7 | # | # |
| 3 | II | 3/4 | (12.2) | (7.4) | 3.4 | # | # |
| 4 | II | 3/4 | (12.8) | (6.0) | (3.1) | # | # |
| 5 | II | 3/4 | (13.0) | (8.4) | 3.8 | # | # |
| 6 | II | 3/4 | (13.0) | (7.4) | 3.8 | # | # |
| 7 | II | 3/4 | (13.0) | (7.4) | 3.4 | # | # |
| 8 | II | 3/4 | (12.2) | (8.2) | 3.4 | # | # |
| 9 | II | 3/4 | (12.0) | (7.0) | 3.6 | # | # |
| 10 | II | 3/4 | (12.6) | (8.2) | 3.4 | 青灰色 | # |
| 11 | II | 口縁3/4 | (13.4) | | | 灰 色 | # |
| 12 | II | 口縁3/4 | (13.8) | | | 暗灰色 | # |
| 13 | II | 口縁3/4 | (15.2) | | | 青灰色 | # |
| 14 | II | 底部 | | 7.4 | | 灰 色 | やや不足 |
| 15 | II | 3/2 | (12.4) | (7.4) | 4.0 | 暗灰色 | 良好 |
| 16 | II | 3/2 | (12.6) | (7.0) | 3.9 | # | # |
| 17 | II | 3/4 | (14.0) | (8.4) | 4.2 | 灰褐色 | 不足 |
| 18 | II | 3/4 | (12.0) | (6.6) | 4.2 | 暗灰色 | 良好 |
| 19 | II | 3/2 | (12.8) | (5.9) | 8.4 | 灰 色 | # |
| 20 | II | 3/2 | (13.6) | (7.8) | 4.3 | 褐 色 | 不足 |
| 21 | II | 口縁3/4 | (12.6) | | | 暗灰色 | 良好 |
| 22 | II | 口縁3/4 | (13.0) | | | 青灰色 | # |
| 23 | II | 底部 | | 7.6 | | 暗灰色 | 良好 |
| 24 | II | 底部 | | 7.0 | | 灰 色 | やや不足 |
| 25 | II | 3/4 | (12.0) | (7.2) | 4.3 | # | # |
| 26 | II | 3/4 | (13.0) | (8.6) | 4.0 | 暗灰色 | # |
| 27 | II | 底部 | | 7.4 | | 明褐色 | 不足 |
| 28 | II | 底部 | | 6.6 | | 暗灰色 | 良好 |
| 29 | II | 底部 | | 6.6 | | # | # |
| 30 | II | 3/2 | (13.2) | (6.4) | 4.8 | 淡灰褐色 | 不足 |
| 31 | II | 3/2 | (12.4) | 6.4 | 4.3 | 暗灰色 | 良好 |
| 32 | II | 底部 | | 7.2 | | # | # |
| 33 | II | 底部 | | 6.2 | | 暗褐色 | # |
| 34 | II | 底部 | | 7.4 | | 暗灰色 | # |
| 35 | II | 底部 | | 7.2 | | 灰 色 | # |
| 36 | II | # | | (6.4) | | # | # |
| 37 | II | 3/2 | (13.0) | (8.0) | (3.5) | 暗灰色 | # |
| 38 | II | 3/4 | 12.0 | 6.4 | 3.6 | 灰褐色 | 不足 |
| 39 | II | 3/2 | (13.2) | (8.2) | 3.6 | 暗灰色 | 良好 |
| 40 | II | 3/4 | (13.6) | (8.0) | 3.7 | 灰褐色 | 不足 |
| 41 | II | 3/4 | (11.8) | (7.2) | 3.9 | # | # |
| 42 | II | 3/2 | (13.2) | (7.8) | 4.1 | 灰 色 | 良好 |
| 43 | II | 3/2 | (12.2) | (7.6) | 3.9 | 暗灰色 | # |
| 44 | II | 口縁3/4 | (12.0) | | | # | # |
| 45 | II | 3/2 | (11.7) | 6.8 | (4.0) | # | # |
| 46 | II | 底部 | | 7.0 | | 褐色 | 不足 |
| 47 | 环 | 底部 | | (6.4) | | 暗灰色 | 良好 |
| 48 | II | 底部 | | (7.0) | | # | # |
| 49 | II | 底部 | | (6.8) | | # | # |
| 50 | II | # | | 6.6 | | # | # |
| 51 | II | 底部 | | 7.0 | | # | # |
| 52 | II | 底部 | | (7.0) | | # | # |
| 53 | II | 3/2 | (13.0) | 8.4 | 3.9 | 灰褐色 | 不足 |
| 54 | II | 3/4 | (12.8) | (7.6) | 3.8 | 灰白色 | やや不足 |
| 55 | II | 3/4 | (14.0) | (9.0) | 4.4 | 明褐色 | 不足 |
| 56 | II | 3/4 | (11.8) | (7.0) | 3.6 | # | # |
| 57 | II | 底部 | | (7.0) | | 灰褐色 | # |
| 58 | II | 底部 | | (7.8) | | # | # |
| 59 | II | 底部 | | (7.4) | | 淡灰褐色 | # |
| 60 | II | 3/2 | 13.2 | 7.4 | 4.1 | 灰 色 | やや不足 |
| 61 | II | 3/2 | (12.4) | (8.2) | 3.8 | 灰褐色 | 不足 |
| 62 | II | 3/2 | (12.2) | (7.4) | 4.2 | # | # |
| 63 | II | 底部 | | (7.0) | | 暗灰色 | 良好 |
| 64 | II | 3/2 | (12.0) | (7.2) | 4.3 | 青灰色 | # |
| 65 | II | 3/2 | (12.6) | 6.6 | 3.9 | 褐色 | 不足 |
| 66 | II | 3/2 | (13.2) | (7.8) | 2.7 | 灰 色 | やや不足 |
| 67 | II | 3/4 | (10.6) | (7.4) | 4.3 | # | 良好 |
| 68 | II | 底部 | | 6.8 | | # | やや不足 |
| 69 | II | 口縁3/4 | (15.8) | | | 暗灰色 | 良好 |
| 70 | II | 口縁3/4 | (16.4) | | | 暗灰色 | 良好 |
| 71 | II | 口縁3/4 | (16.0) | | | # | # |
| 72 | II | 3/4 | (12.6) | (8.4) | 3.7 | # | # |
| 73 | II | 3/4 | (13.4) | (8.8) | 3.7 | 灰 色 | やや不足 |
| 74 | II | 3/4 | (13.0) | (8.4) | 3.7 | 暗灰色 | 良好 |
| 75 | II | 3/4 | (11.6) | (7.6) | 3.2 | # | やや不足 |
| 76 | II | 底部 | | 7.0 | | # | 良好 |
| 77 | II | 底部 | | 8.4 | | 灰 色 | やや不足 |
| 78 | II | 底部 | | (9.2) | | 暗灰色 | 良好 |
| 79 | II | 底部 | | (8.2) | | # | # |
| 80 | II | 3/2 | (12.2) | 7.6 | 3.9 | 暗褐色 | やや不足 |
| 81 | II | 3/2 | (13.4) | (8.2) | 3.9 | 暗灰色 | 良好 |
| 82 | II | 3/2 | (12.0) | (7.0) | 4.0 | # | # |
| 83 | II | 3/4 | (12.8) | (6.8) | 3.6 | 灰 色 | # |
| 84 | II | 3/4 | (13.2) | (7.4) | 3.8 | 暗灰色 | # |
| 85 | II | 3/4 | (12.6) | (8.0) | 3.7 | # | やや不足 |
| 86 | II | 3/4 | (12.0) | (7.0) | 3.8 | # | 良好 |
| 87 | II | 口縁3/4 | (10.6) | | | 暗青灰色 | # |
| 88 | II | 底部 | | (7.6) | | # | # |
| 89 | II | 3/2 | (12.6) | (8.4) | 3.9 | 暗灰色 | # |
| 90 | II | 3/2 | (12.6) | 8.4 | 3.2 | # | # |

| 番号 | 器種 | 遺存度 | 法量 | | | 色調 | 機能 |
|-----|------|-------|--------|--------|-----|------|------|
| | | | 口径 | 底径 | 器高 | | |
| 91 | II | 3/4 | (14.2) | (10.6) | 3.6 | II | II |
| 92 | II | 3/2 | (13.4) | (8.8) | 3.8 | II | II |
| 93 | 坏 | 3/2 | (14.2) | 10.4 | 3.5 | 暗灰色 | 良 好 |
| 94 | II | 口緣3/4 | (11.2) | | | II | II |
| 95 | II | 口緣3/6 | (12.4) | | | 青灰色 | II |
| 96 | II | 3/4 | (11.4) | (7.6) | 3.6 | 淡灰褐色 | 不足 |
| 97 | II | 底部3/4 | | 8.0 | | 暗灰色 | 良 好 |
| 98 | II | 底部3/2 | | 8.0 | | 灰色 | II |
| 99 | II | 底部3/3 | | (7.6) | | 暗灰色 | II |
| 100 | II | 底部3/2 | | 5.4 | | II | II |
| 101 | II | 底部3/4 | | (9.0) | | II | II |
| 102 | II | 底部3/3 | | (7.6) | | 暗褐色 | II |
| 103 | II | 底部3/2 | | 8.0 | | 暗灰色 | II |
| 104 | II | 底部3/4 | | (8.8) | | II | II |
| 105 | II | 底部片 | | | | II | II |
| 106 | II | 口緣3/6 | (15.4) | | | II | II |
| 107 | II | 3/2 | (11.4) | (7.8) | 1.9 | II | II |
| 108 | II | 3/2 | 12.7 | 8.2 | 4.3 | II | II |
| 109 | II | 3/4 | (12.0) | (7.4) | 4.1 | II | 不足 |
| 110 | II | 底部3/4 | | (8.0) | | II | 良 好 |
| 111 | II | 3/3 | (12.0) | (7.2) | 3.9 | II | 中等不足 |
| 112 | II | 3/4 | (12.0) | (7.4) | 4.1 | II | 良 好 |
| 113 | II | 底部3/4 | | (8.4) | | II | II |
| 114 | II | 底部3/2 | | (8.0) | | 灰色 | 不足 |
| 115 | II | 底部3/4 | | (7.8) | | 暗灰色 | 良 好 |
| 116 | II | 3/3 | (14.0) | (10.2) | 3.6 | 灰白色 | 中等不足 |
| 117 | II | 底部3/3 | | 9.0 | | 灰色 | II |
| 118 | II | 底部3/3 | | (9.6) | | II | II |
| 119 | II | 3/6 | (11.8) | (6.6) | 3.6 | 暗灰色 | 良 好 |
| 120 | II | 底部3/2 | | 8.0 | | 淡明褐色 | 不足 |
| 121 | II | 底部3/2 | | 7.8 | | 暗灰色 | 良 好 |
| 122 | II | 3/6 | (13.0) | (8.4) | 4.0 | II | II |
| 123 | II | 3/6 | (13.8) | (8.0) | 2.7 | II | II |
| 124 | 高台脚杯 | 3/3 | 11.2 | 7.2 | 5.1 | II | II |
| 125 | II | 3/4 | (11.4) | (6.8) | 4.9 | II | II |
| 126 | II | 3/4 | (10.6) | (6.6) | 5.2 | II | II |
| 127 | II | 底部3/4 | | (6.8) | | 灰色 | II |
| 128 | II | 底部3/3 | | (6.8) | | 暗灰色 | II |
| 129 | II | 底部3/4 | | (6.8) | | II | II |
| 130 | II | 底部 | | (7.6) | | II | II |
| 131 | II | 3/6 | (6.2) | | | II | II |
| 132 | II | 底部 | | (6.8) | | 暗褐色 | 中等不足 |
| 133 | II | 3/3 | (13.8) | 8.2 | 6.4 | 暗灰色 | 良 好 |
| 134 | II | 3/2 | (16.8) | (10.4) | 7.8 | II | II |
| 135 | II | 底部3/3 | | (10.2) | | II | II |

| 番号 | 器種 | 遺存度 | 法量 | | | 色調 | 焼成 |
|-----|------|------------------|-----------|--------------|--------------|--------------|------|
| | | | 口径 | 底径 | 器高 | | |
| 136 | II | 底部 $\frac{1}{3}$ | | (9.8) | | II | II |
| 137 | II | 底部 $\frac{1}{4}$ | | (9.2) | | II | II |
| 138 | II | 底部 $\frac{1}{2}$ | | (8.8) | | II | II |
| 139 | 高台杯 | 底部 $\frac{1}{4}$ | | (10.4) | | 暗灰色 | 良好 |
| 140 | II | 底部 $\frac{1}{3}$ | | (8.2) | | 暗青灰色 | II |
| 141 | II | 底部 $\frac{1}{4}$ | | (10.2) | | 暗灰色 | II |
| 142 | II | 底部 $\frac{1}{6}$ | | (8.2) | | 灰黑色 | II |
| 143 | II | 口縁 $\frac{1}{4}$ | (15.2) | | | 暗灰色 | II |
| 144 | II | 口縁 $\frac{1}{6}$ | (17.2) | | | II | II |
| 145 | II | 口縁 $\frac{1}{6}$ | (15.2) | | | II | II |
| 146 | 盤 | 口縁 $\frac{1}{6}$ | (18.4) | | | 灰色 | やや不足 |
| 147 | 蓋 | $\frac{3}{4}$ | | | | 暗灰色 | 良好 |
| 148 | II | $\frac{3}{4}$ | (16.8) | | | II | II |
| 149 | 口つまみ | | | | | | |
| 150 | 口つまみ | | | | | 青灰色 | II |
| 151 | II | $\frac{1}{6}$ | (16.0) | | | II | II |
| 152 | II | $\frac{1}{6}$ | (19.0) | | | 灰色 | やや不足 |
| 153 | II | $\frac{1}{6}$ | (17.0) | | | 暗灰色 | 良好 |
| 154 | II | $\frac{1}{6}$ | (18.6) | | | II | II |
| 155 | II | | | | | II | やや不足 |
| 156 | II | $\frac{1}{4}$ | (18.0) | | | II | 良好 |
| 157 | II | $\frac{1}{5}$ | (15.6) | | | II | II |
| 158 | II | | | | | II | II |
| 159 | II | $\frac{1}{6}$ | (17.2) | | | II | II |
| 160 | 裏 | $\frac{1}{4}$ | (21. .2) | 腰薄 (29.0) | 腰薄 (20.3) | 腰薄 (20.3) | II |
| 161 | II | $\frac{1}{6}$ | (22. .6) | (19. .2) | (19. .2) | (22.9) | |
| 162 | II | $\frac{1}{6}$ | (9.6) | | | II | II |
| 163 | II | 側面部 | | | | II | II |
| 164 | II | II | | | | 灰色 | II |
| 165 | II | II | | | | 暗灰色 | II |
| 166 | II | II | | | | 灰色 | II |
| 167 | II | II | | | | 青灰色 | II |
| 168 | II | II | | | | 暗灰色 | II |
| 169 | II | II | | | | II | II |
| 170 | (壺) | II | | | | II | II |
| 171 | 長頸瓶 | 口縁 $\frac{1}{3}$ | (8.2) | 腰薄 (4.9) | | | II |
| 172 | 壺 | 底部 $\frac{1}{4}$ | (8.4) | | | II | II |
| 173 | 瓦 | 磁片 | 腰薄 W.3 | 腰薄 W.3 | 腰薄 W.3 | II | II |
| 174 | 不明 | | (13.0) | | | | |

図 版



航空写真 (1/10,000)

上が北



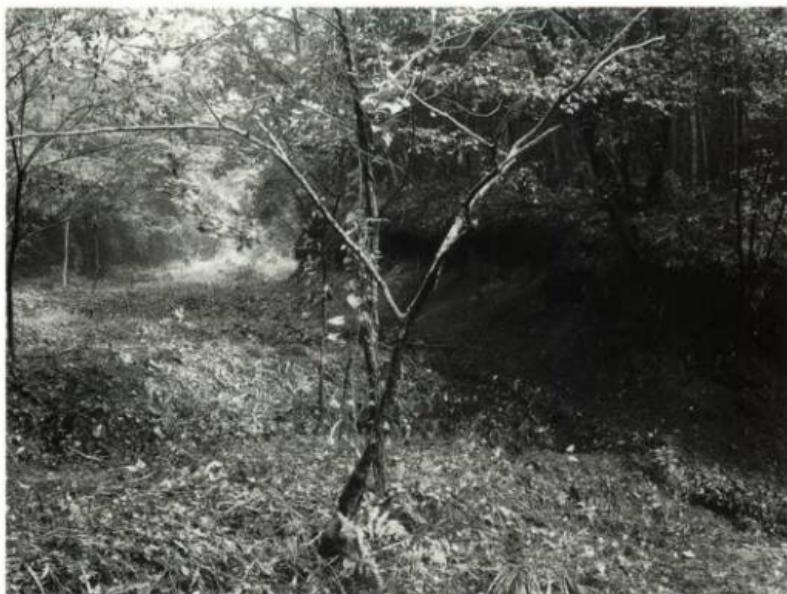
1. 遺跡近景

南西より



2. 遺跡近景

南より



1. 調査前

北西より



2. 調査前

北より



1. Qトレンチ深掘断面

南西より



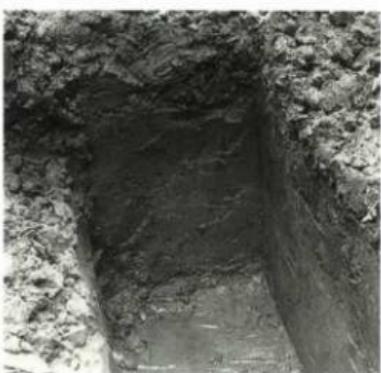
2. Rトレンチ深掘断面

北東より



3. Sトレンチ深掘断面

南西より



4. Tトレンチ深掘断面

北東より



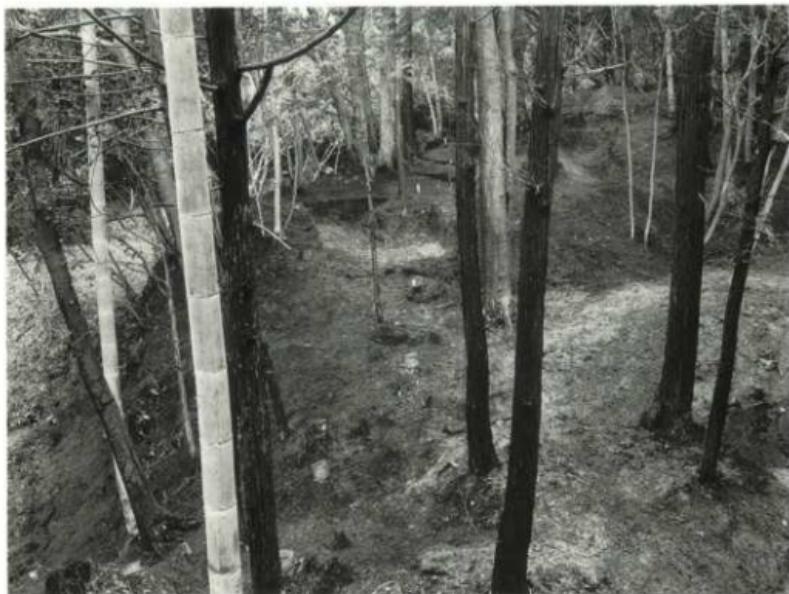
5. Vトレンチ

南西より



6. Wトレンチ

南西より



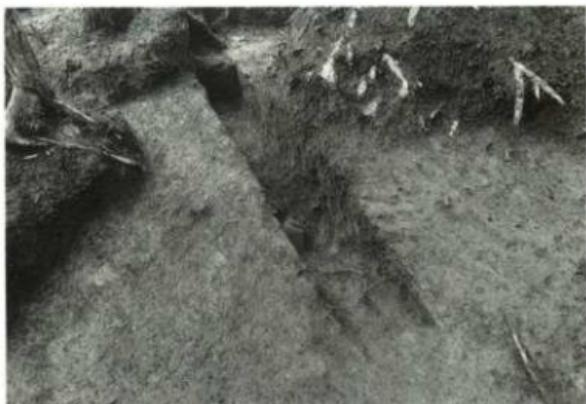
1. 1号窯跡および灰原全景

西より



2. 1号窯跡

東より



1. 1号窯跡断面
A-A'
南西より



2. 1号窯跡灰原
断面
D-D'
東より



3. 同上
西より



1. 2. 3号窯跡
断面
北より



2. 2号窯跡断面
北より



3. 3号窯跡断面
北より



1. 住居跡
北西より



2. 炭窯跡
東より



3. 溝状遺構
西より



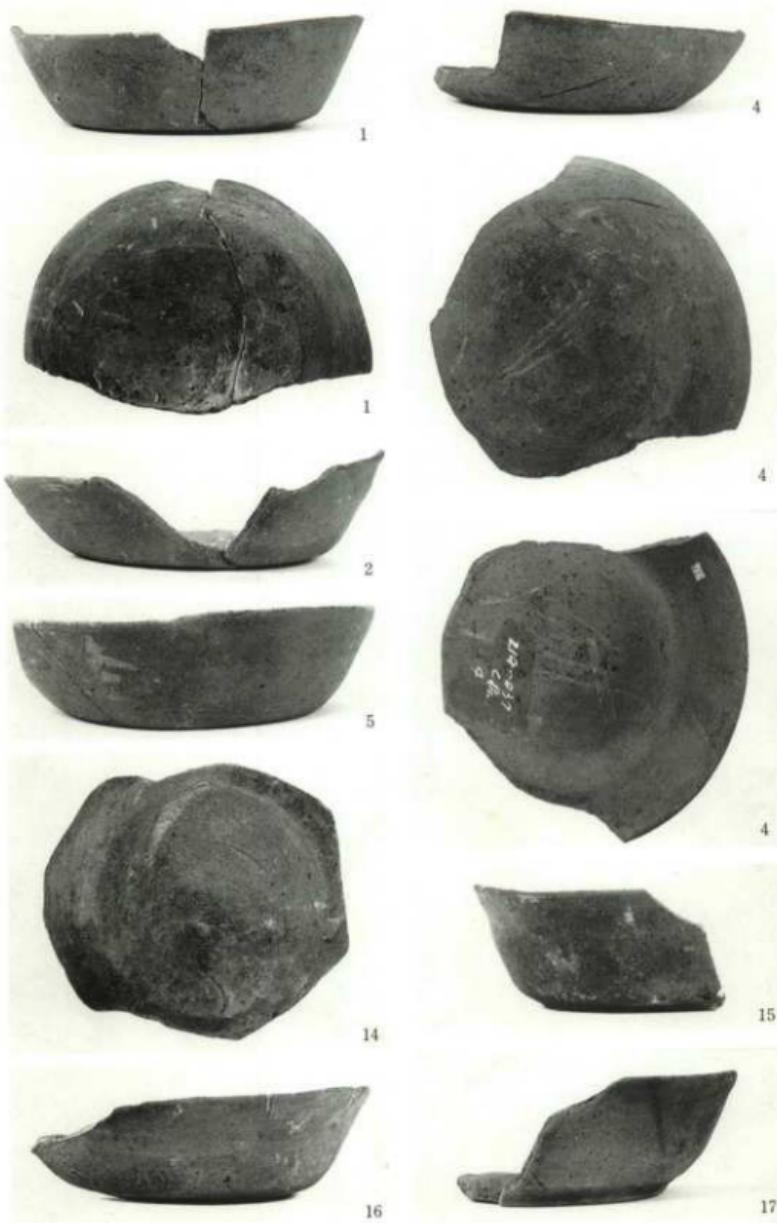
1. 左 Yトレンチ
北東より
右 Xトレンチ
北東より



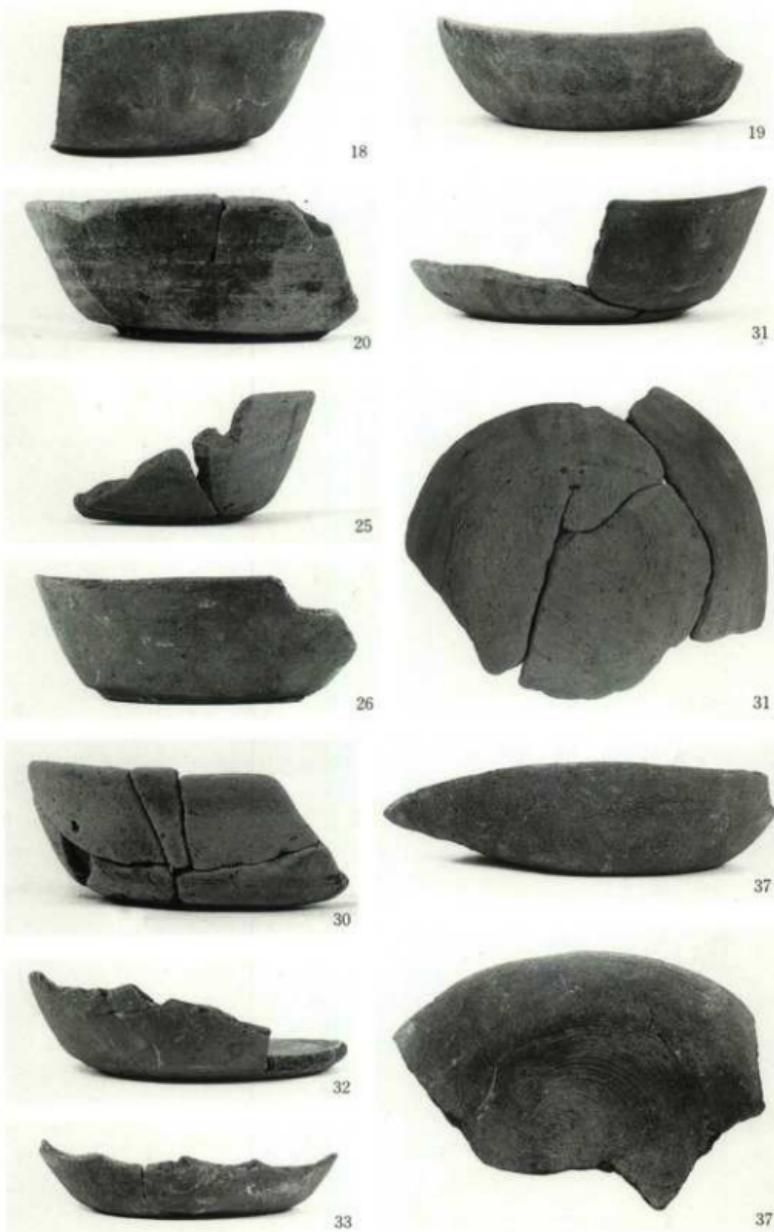
2. 第2地点
北東より



3. 第2地点
灰原?
東より



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)



38



42



38



42



43



53



45



53



45



54



60



61



60



62



64



63



65



72



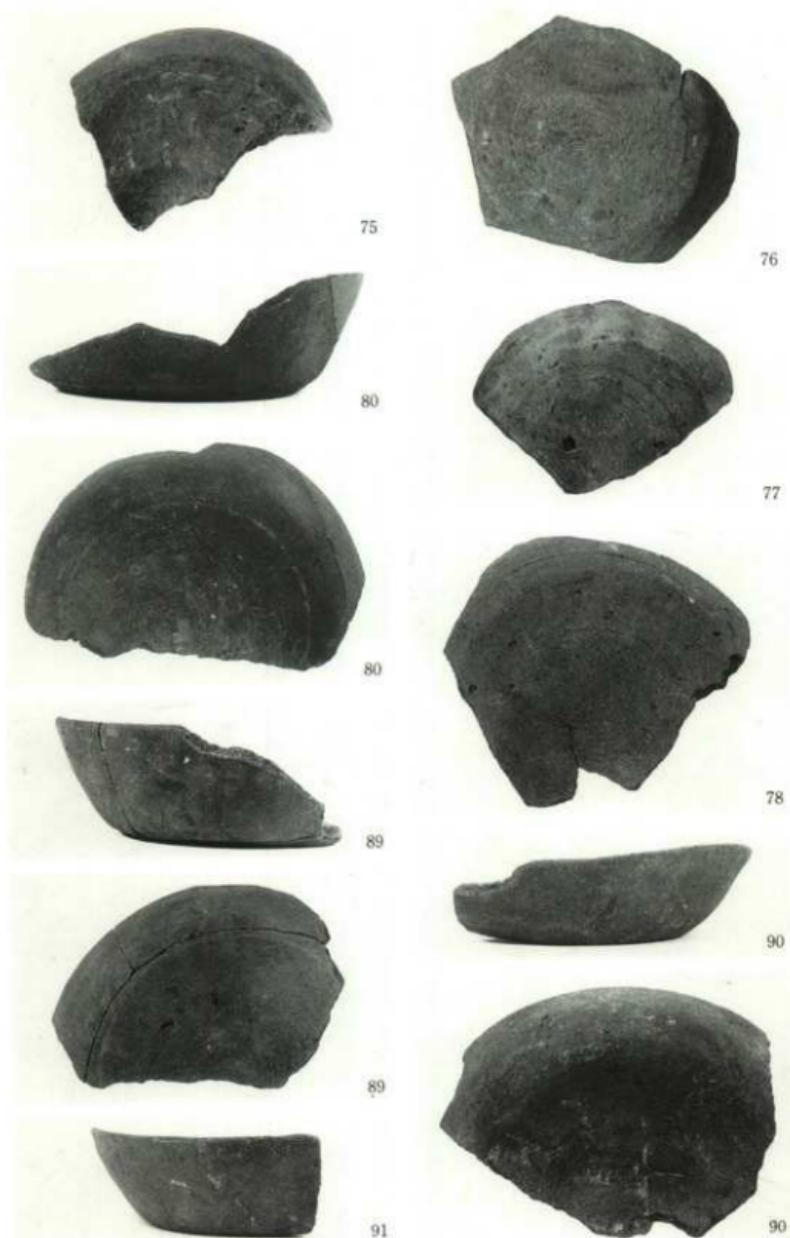
67



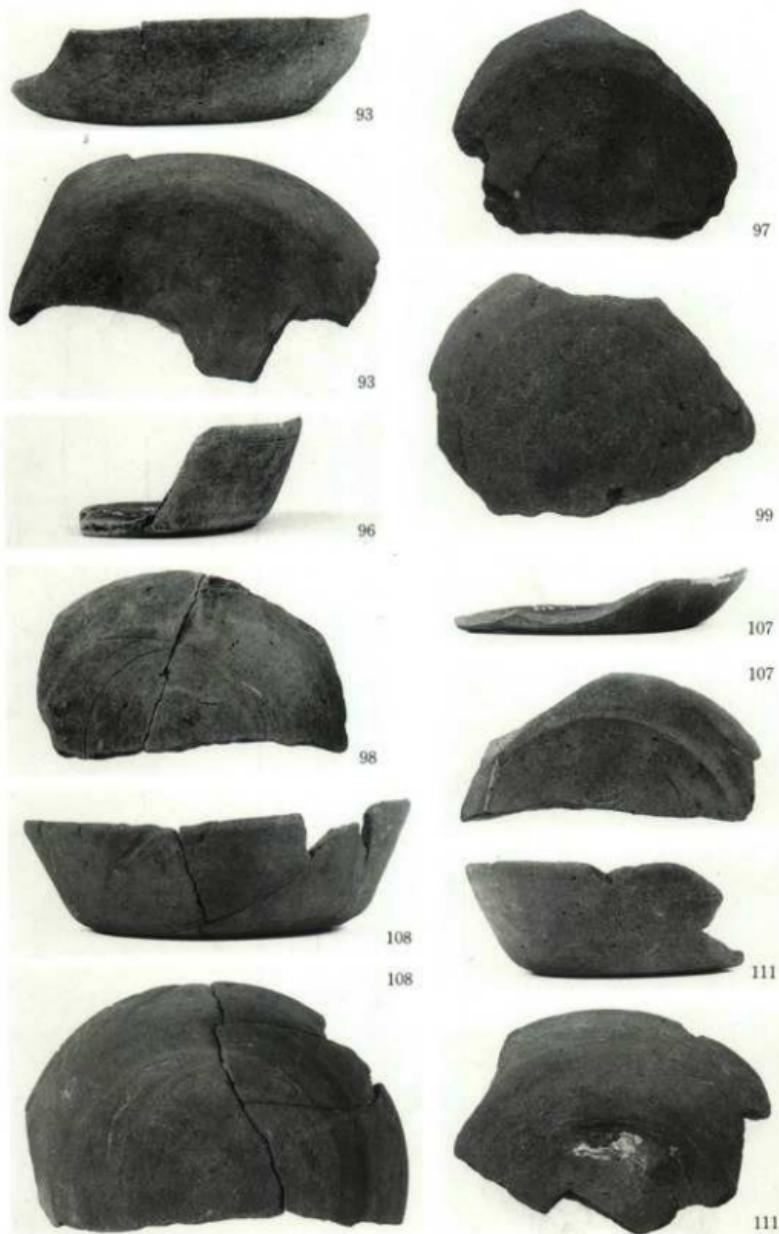
72

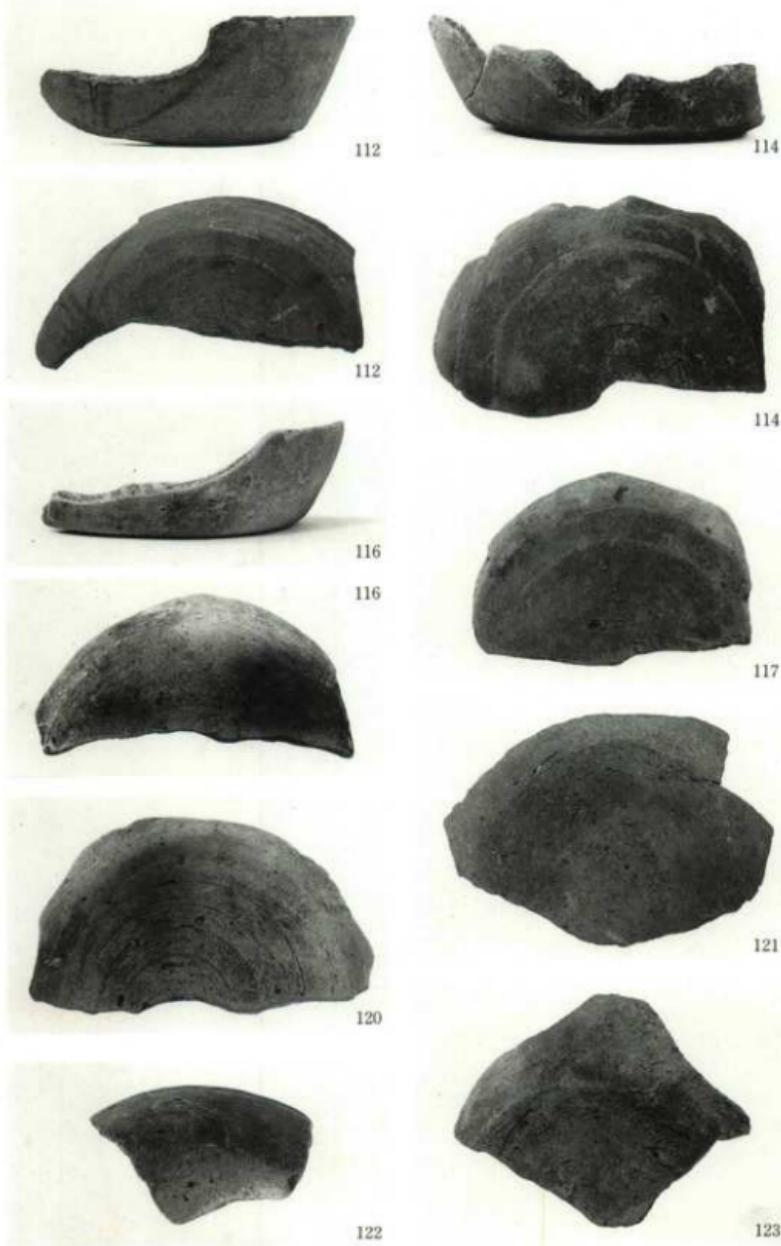


68



出土遺物 (5)





出土遺物 (7)



124



128



124



130



130



127



133



132



132



133



134



139



134



139



135



136



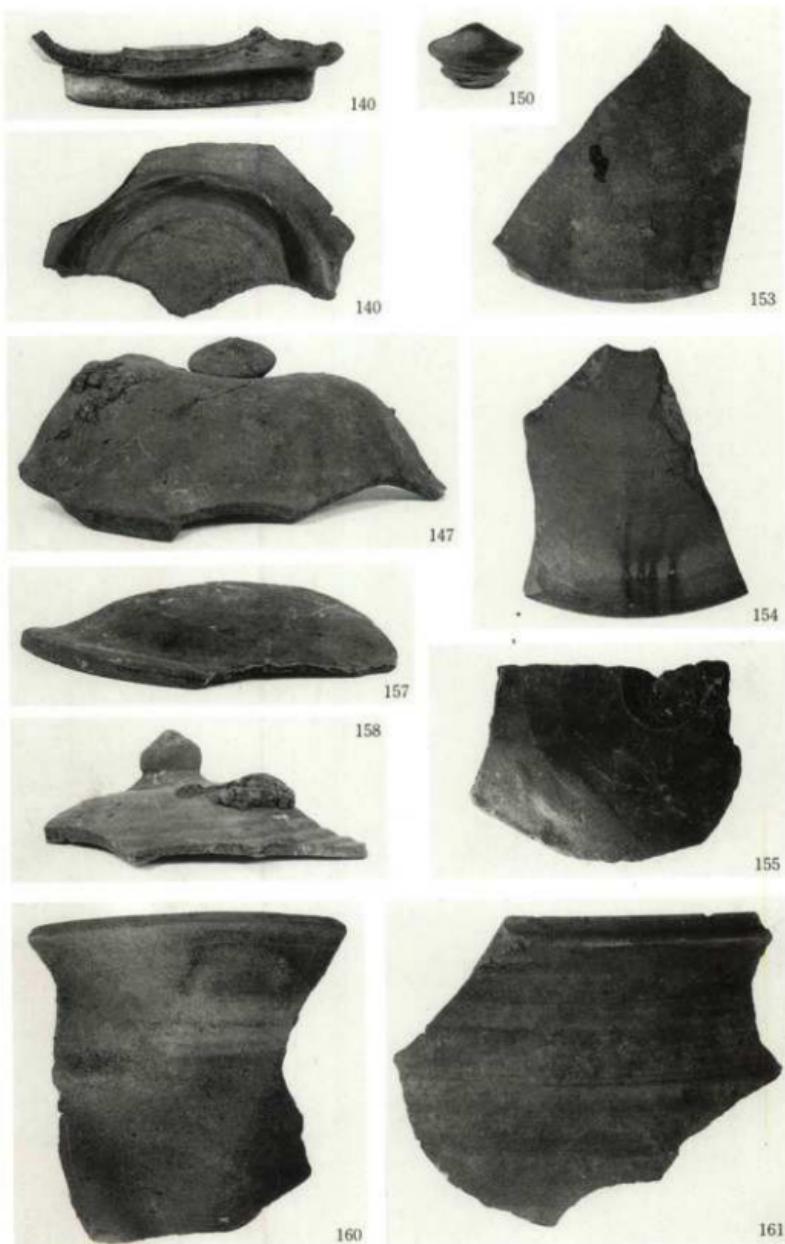
138

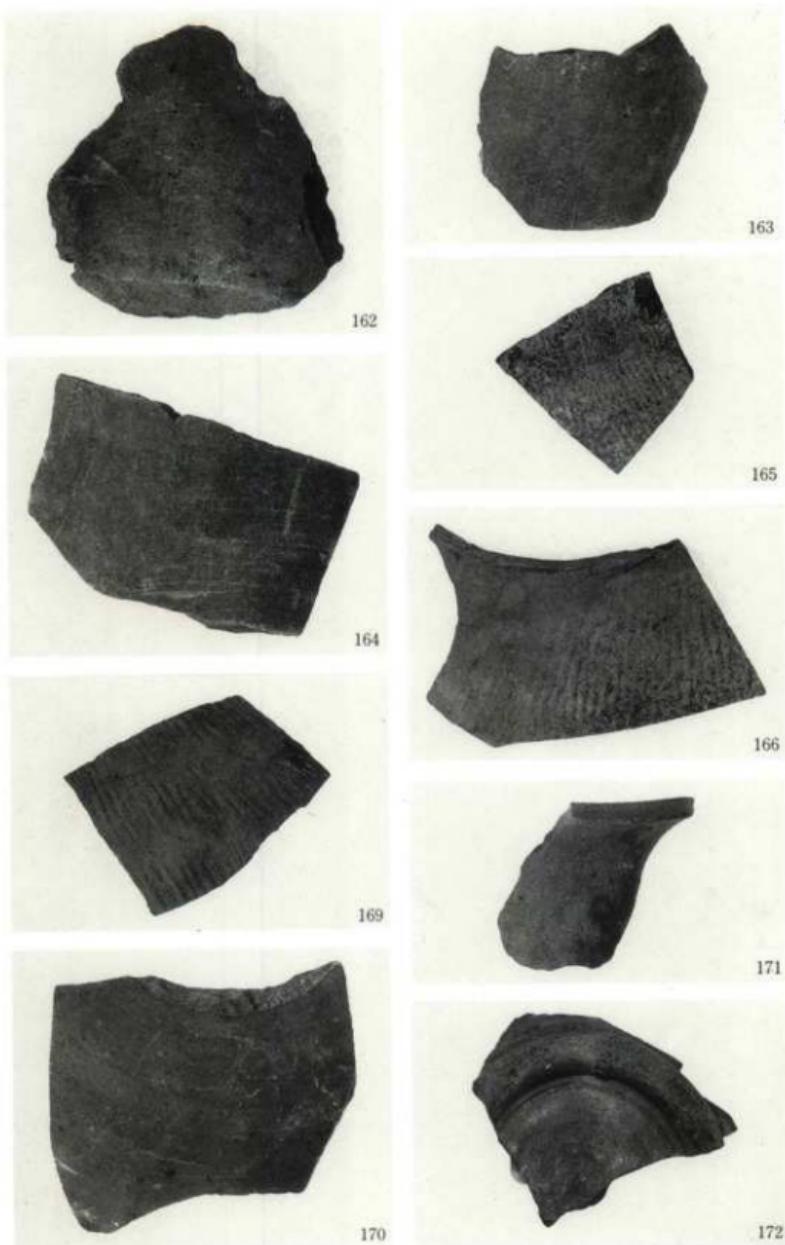


138

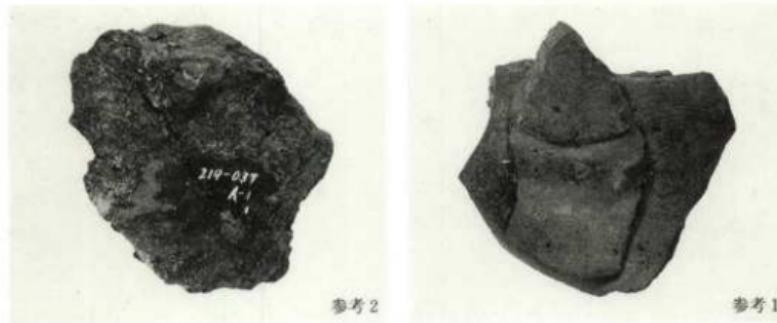
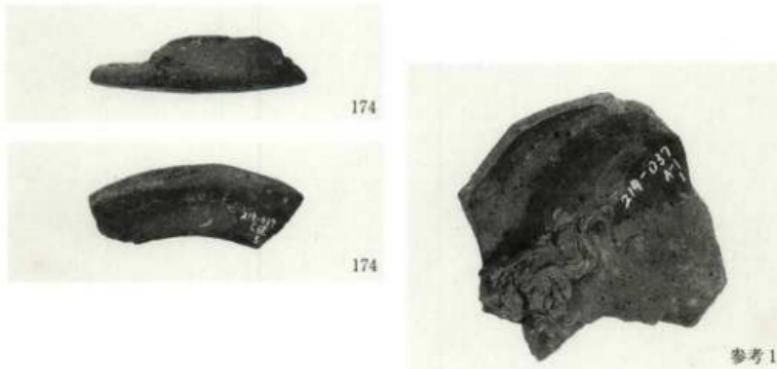


136

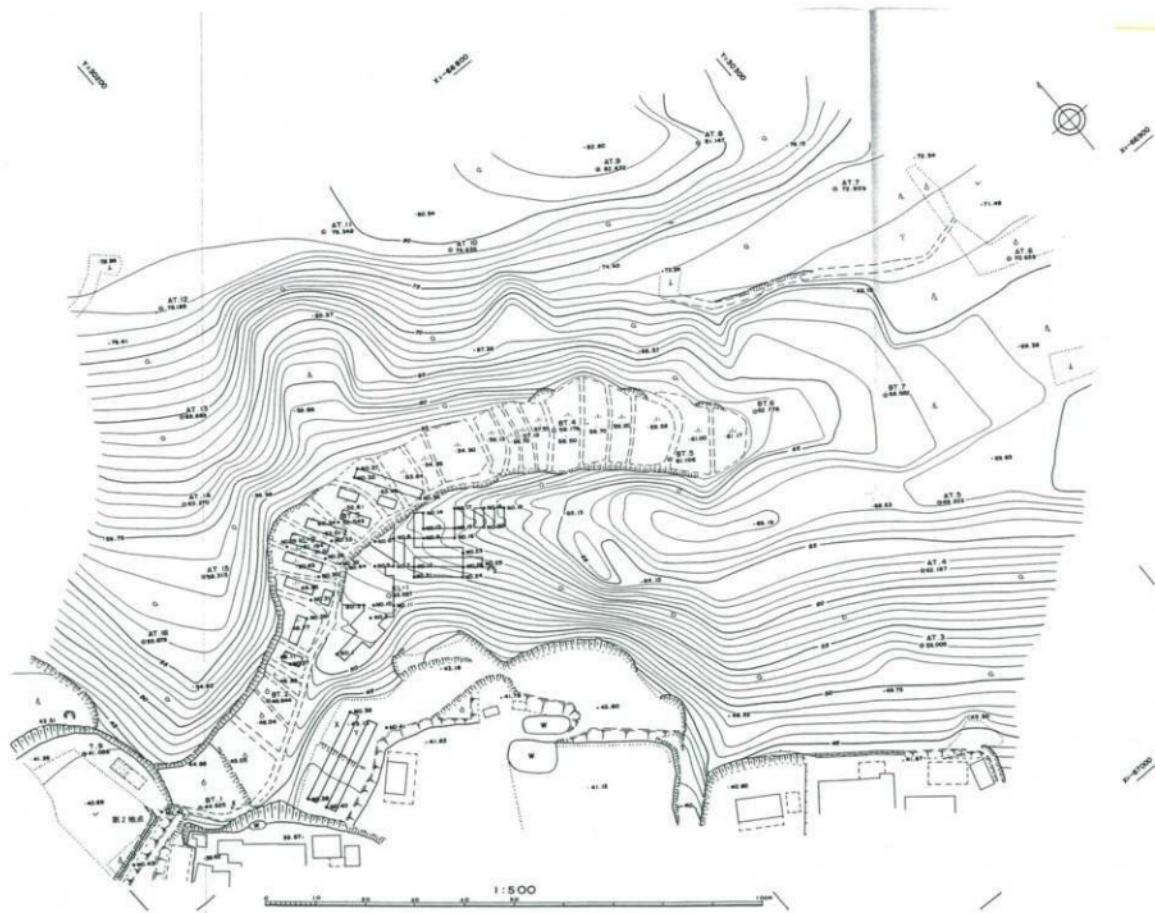




出土遺物 (1)



出土遺物 (2)



付図 石川須恵器窯跡地形図・トレンチ配置図 (1/500)

市原市石川須恵器窯跡確認調査報告書

昭和63年3月31日発行

発 行 財團法人 千葉県文化財センター
千葉市葛城2丁目10番1号

印 刷 有限会社 正 文 社
千葉市都町2丁目5番5号

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。